第６回熊本大学
東光原文学賞作品集

2014年3月発行
熊本大学附属図書館
Kumamoto University Library

◆ 大 賞 ◆

四色衣　　脇山　怜

◆ 優秀賞 ◆

ＨＥＮＳＨＩＮ	吉川　真悟
水面の蝶は空を見るか	有沢　紅夜
さよなら、ランガー	植草　しおん
金木犀の彼女	直井　武次

第六回熊本大学東光原文学賞作品集

第六回東光原文学賞作品集　目次

館長のことば　熊本大学附属図書館長　大熊　薫／4

第六回東光原文学賞の公刊によせて

大　賞

四色衣　脇山　怜／7
（医学部保健学科三年）

優秀賞

HENSHIN　吉川　真悟／53
（教育学部中学校教員養成課程国語専攻四年）

優秀賞
水面の蝶は空を見るか　有沢　紅夜／86
（教育学部地域共生社会課程三年）

優秀賞
さよなら、ランガー　植草　しおん／107
（医学部医学科六年）

優秀賞
金木犀の彼女　直井　武次／138
（工学部情報電気電子工学科一年）

選考を終えて

西川　盛雄「言葉磨きの楽しさと喜び」の発見　／156
岩岡　中正「選考を終えて」／159
高峰　武「何を表現するのか」／162

第六回東光原文学賞の公刊によせて

附属図書館長　大熊　薫

附属図書館は、平成二十五年度もその事業の一つとして、東光原文学賞のための作品募集を行いました。この事業の目的は、幅広く学生諸君に読書への関心をもっていただくこと、さらに日本語の文章を書く能力の向上を図ること、そしてこれを機に図書館を今以上に活用していただくこと等です。

集まった作品集の中から最もすぐれた作品を大賞として一篇、残念ながら大賞にまでは届かなかったが、それでもやはり素晴らしいと思われる作品を三篇選ぶことにしています。ただ、本年度は優秀な作品が多かったため、本来の三篇に加え、さらにもう一篇を加えることに審査員全員の意見が一致しました。これら優秀作品の表彰を行うと同時に、この東光原文学賞作品集に掲載し、その名誉をたたえます。

今回は次の通り、全ての学部から合計十九篇の応募がありました。

文学部（一年二篇、三年二篇）計四篇　教育学部（三年一篇、四年一篇）計二篇　法学部（二年一篇）計一篇　理学部（二年一篇、三年二篇）計三篇　医学部（三年一篇、六年一篇）計二篇　薬学部（一年一篇、五年一篇）計二篇　工学部（一年四篇、三年一篇）計五篇

今年度、大学院研究科から投稿がなかったことはまことに残念なことでした。次回に期待しています。

選考に当たられたのは、西川盛雄先生（熊本大学名誉教授）、岩岡中正先生（熊本大学名誉教授）及び高峰武先生（熊本日日新聞社取締役）の三先生方です。十二月中旬に開催された選考委員会では、どの作品を優秀賞として選考するか、熱い議論が戦わされました。投稿作品全部をこれほど熱心に読んでいただいた先生方には、心より感謝申し上げます。

今回惜しくも選考に漏れた学生諸君、また今年度は応募されなかった方、来年度に向けてどうぞ今から挑戦の準備をしてください。楽しみに待っています。

ところで、十八世紀に活躍したフランスの博物学者ビュフォンが、アカデミー・フランセーズの会員のひとりとして正式に承認された時、会員たちの前で『文体論』というタイトルのもと、講演を行いました。その中の有名なセリフが「文は人なり」です。日本でこれは「文章を読めば書き手の人となりがわかる」と解釈されています。しかし彼の講演を全て読むと、そのようには解釈されません。彼が言いたかったこと、それは大まかに言えば「まず文章を書く前に、熟慮が必要である。さもなければペンは進むべき道を見失ってとんでもない方向に走ってしまう。しかも書かれた内容は、もっと巧みな人によってやすやすと奪い去られてしまう。人間が他人から奪い去られることがないの

と同様に、奪い去られることがないような文を作らなければならない。立派に作られた作品のみが末代まで残る。そのような意味で、文というのは人間そのものなのだ」ということなのです。

私たちは往々にして、一つの文章だけを取り上げてその中身を判断しがちです。しかし、本来は書かれてあることの全体をよく把握し、その後、その文章の前後関係からその文が何を意味しているか判断する必要があります。それを考えると、書くほうの立場からすれば、誤解のない文を作ること、これはなんと大変な作業であることでしょう。

今回、この東光原文学賞に選ばれた作品集はこのような困難を見事に乗り越えた力作ばかりです。これを機会にますます文章作成に精進してくださればと願って止みません。

上段：西川　岩岡　高峰
下段：牧　脇山　大熊　大塚　吉川

第六回東光原文学賞大賞受賞作品

四色衣

脇山　怜

私は幼少の頃より、数えるほどしか病院から出たことがなかった。

心の臓に抱える欠損。

生まれついての持病が、私の自由を奪う大きな原因であった。

世間の男ならば仕事に励んだり嫁をもらって家庭を作るような年になっても、一向に私の病気を治す技術は世に現れることはなく、その結果、私はぐうたらとした厄介者として家族の生活を圧迫し続けている次第である。

例えばもの言わず、只眠り続けるほど重症であったならば良かった、と思うことがある。しかし理想と現実はやはり異なるものなのだろうか、私は持病の発作が出るまでは普通の健やかな人のように病院の中を歩き回ることができ、飯もたくさん食うことが出来た。そんな私に腹を立てる者がいても仕方あるまい。影で私と私の家族がなんと言われているのか、知らぬ話では無かった。

いつも誰かが替えてくれる清潔なシーツの上に体を横たわらせて目を閉じる。私はよく寝た。

特にすることもなかったし、汗を流すような運動は禁止されていたからだ。
今日も窓から差し込む陽光が私の瞼をじんわりと温める。
そういえば、病院の床で眠りにつくと、不思議な体験をすることがあった。
寝ているのだから、夢を見ているのに間違いないのだろうが、どうにも夢では片付けられないようなおかしな体験なのだ。
古今東西、桃源郷だとか、妖精の国だとか、人が不可思議な魔境に彷徨いでる話が存在する。それと同じようなものかもしれないと、最近になって本気で信じるようになってきたくらいだ。寝ている間に私の精神が体を離れ、そう言った場所を彷徨い、眠りから覚めると同時に俗世に帰還しているとしてもありえない話ではない、とまで思っている。
まるで夢に見た蝶の姿こそ現実で、現実と思っているものこそ夢である話のように。
そして今日も私は眠りにつく。願わくば、天の国のようにすがしい場所であることを夢見て。
そうしているとどうだろう、瞼の裏の闇の向こうに、星のような光が見えた。

若葉が深緑に煌く丘に来た。
緩やかな傾斜に沿うように生えた木々は、黄金色をした果実をたわわに実らせている。
まるで豊かなる夏のような日和。
命の輝きが眩しい場所であった。
「美味そうな木の実だ。ひとつもいでしまっても構わないだろうか」

見たことの無い果実を目にした私は、それが誰のものか、ここが何処なのかも深く考えることもせず、手近な一つをぷつりともいだ。

手のひらに収まるほどの小さな木の実は、うっすらと生えた産毛が日の光に照らされて輝いている。がりりと齧れば口の中いっぱいに汁気を満たしてくれそうだ。

喉の乾いていた私は、もいだ実に歯を当て食べようとした。すると、近くで人の話し声が聞こえてくるではないか。

「なんとも嫌な匂いだ。こいつは患っているに違いない」

「あぁ、左様。顔色も芳しくない」

「ご覧あの目を。虚ろで落ちくぼんでいる」

しわがれた老爺のようなくぐもった声。

その声が私のことを噂しているのは明白だった。話声は私を囲むように聞こえてくる。しかし、どうしたことか、とても近くから私を見ているような話しぶりであるのに、姿が全く見当たらない。

「誰だい。私の噂をしているのは。姿を見せずにいるだなんて、たいそう無礼じゃないか」

私は周囲にいるはずである声の主達にそう言ってやった。姿の見えない誰かから値踏みをされることほど、気分が悪いことはない。

しゃくしゃくっ。返事が聞こえないので、八つ当たりをするように、左手に持った黄金色の果実を前歯で齧った。

「「御人、私の体は旨いかね」」
私は驚いてむせてしまった。今の声は明らかに齧った木の実が喋ったように聞こえたからだ。気管に入った欠片に咳が止まらないでいると、今度は木々の間を抜けて、年嵩の翁が現れた。
「これは珍しい。この丘にお客様がいらっしゃろうとは」
薄い浅葱色の衣を羽織った翁は、包丁で入れた切れ目のように細い目と、つるりとした玉のような丸顔をしていた。
翁は背の低い木の枝に腰掛けると、可笑しそうに私の顔を覗いた。
「ここの杏を召し上がったので？」
呵呵呵。翁は歯を見せて笑った。なるほど、この黄金色の実は杏だったのか。今まで干したものしか見たことがなかったので、干す前がこんな風に黄金色をしているとは知らなかった。しかしこの翁は何をそんなに可笑しがっているのだろう。
「手元をご覧なさい。貴方の齧った杏はどうなっていますか？」
変わったことを言う翁だ。杏が一体どうしたというのだ。しかし翁の言う通りに左手を見下ろすと、不思議なことに、杏の実は齧られる前の姿に戻っていた。
「これはどうしたことだ。まるで時間が巻き戻ったようじゃないか」
「不思議でしょう。この土地の木の実は、食われてもまた元通りになるのです。私がここに来た時からそうでした。それに加えてもう一つ、不思議なことがあるのですよ」
「「先生、あまりこの者と話をしてはいけません」」

今度はハッキリと、左手に持った杏の実が声を発した。
「なんてことだ。木の実が喋っている」
「「先生、この御人は東の方より来ました。御所様から衣も賜っておりません。きっと彷徨える生者の類でしょう」」
「「要らぬ業を被らされる前に、元来た所に戻すのが賢明かと存じます」」
追随して周りの木の実達も喋りだす。先程私の噂話をしていたのはこいつらだったのか。しかし随分な物言いをする木の実達だ。翁のことを先生と呼び、尊父のように恭しく接しているにもかかわらず、私のことはまるで穢れ者のように扱う。
「この通り、ここの杏達はよく口を利くのです。面白いでしょう。……ところで、貴方は東の方からいらしたのですか？」
柔和な笑顔を浮かべた翁は背を曲げて、目線を私に合わせた。このような話し方には既視感を覚える。なぜだろうか。
翁は杏の実の静止も聞かず、久しぶりに来た客の私に、興味津々といった様子だ。
「貴方のことはそうだな、東の方と呼ぼう。東の方。貴方はよくこうした場所にいらっしゃるのですか？」
「私のことは好きに呼んでもらってかまわない。実はここに来る途中、自分の名前を忘れしてしまったからね」
このように、私は病院のベッドで寝ていて、気がつけば見知らぬ土地に来てしまっていること

が度々あった。夢というには頭もはっきりしているし、何より五感として周囲を認識できるのだ。足元に踏みしめる草の感覚も、頬を撫でる風の感覚も。

そして、理由は分からないが、こうした場所を彷徨う時にはいつも、自分の名前を思い出せないのが通例であった。

「毎日、とまではいかないが、病院の床の中で日がな一日うとうとしていると、こうして仙境のような場所に彷徨い出ていることがあるな。ほんの数分間の時もあれば、数日現実に戻れないこともある。しかし医者によると私は気も病んでいるらしいから、今見ている光景も、聞いている音も、私が見ている只の幻覚かもしれないがね」

ほぉ……。翁の口から感嘆の溜息が漏れる。自分の顎を片手で撫で、感心したように私の話を聞いていた。あんまりにも熱心に話を聞くものだから、私は恥ずかしくなって話を変えることにした。

「貴方の方こそどうなんだ。名前は？この杏の林には、いつから居るんだい？」

私は決してこの翁よりも年嵩でもなければ、身分の高い者などではないが、幼少の頃より続く入院生活によって、人並みの社会性が育まれることがなかったためだろう、誰に対してもこのように横柄な話し方をしてしまう癖があった。職業婦人である私の妹などはこの話し方に随分と眉をひそめるものだが、如何せんへりくだった話し方をする相手に乏しいものだから、この癖が治ることはこの先ないといっていいだろう。

「私も自分の名前を覚えていません。気がつけばこの丘に立っていました。そうしてその時には

もう、嘗てのことなどはほとんど忘れていたのですよ」
翁はそう言うと、白雲漂う空を眺めた。まるでそこに、彼の置いてきた時間があるかのように。
「へぇ、それは随分羨ましいことだ。私も早く俗世の衣を脱ぎ去って、天の国にでも召されたいものだよ」
杏の丘をそよ風が吹き抜ける。風は若木の枝を揺らし、緑の葉を撫でた。
ここの風は、少年の頃に見た風景を思い出させる。
自分が発した言葉も相まって、私の中に眠っていた古い記憶が、その顔を覗かせ始めた。
この杏の丘は、あの時の場所に似ている……。
しかし、決定的に何かが違うという感覚もあった。あの場所は全てが許され、恐れも不安もない安楽の地であったが、この丘はそうではない。どこか現実と地続きであるような、生々しい何かが手をこまねいているような、そんな不安を感じさせる場所なのだ。
「東の方、貴方は天の国をご覧になったことがあるのですか？」
「もちろんあるさ。あれは私が五つのときだった」
この時の話をすると幼い頃は夢として片付けられ、大人になると狂人扱いをされた。遂には医者に神経病質とまで診断され、私の話は妄言のように誰にも信じてもらえなくなった。
翁はその細い目を見開いていた。先程までとは一変して、緊迫した空気を体に纏っている。顔の表情も強ばり、瞳は不安に揺れていた。
「東の方。教えてください。そこは一体、どんな場所でしたか？」

翁は私の肩を強い力で掴むと、杏の樹に押し付けた。驚きと痛みに顔をわずかにしかめていると、翁はハッと冷静さを取り戻した顔つきに戻り、自分の狼狽ぶりを恥じたのか後ずさりをしながら両手を下した。

「申し訳ありませんでした」

「いや、いいよ。私の話でよければ、ちょうど先ほど思い出していたところだからね」

こうして、すっかり翁の剣幕に押された私は、襟元を直しながら訥々と自分の昔話を話して聞かせることになったのであった。

母親の腹から生まれて以来、私の心の臓には奇形があった。

生まれた瞬間から体中が青黒かったので、産婆は母に死産を告げたほどだったらしい。

私はこの自分の病気には長い間無知であったが、数年前に見た医学書によれば、私には新しい血液と古い血液を分ける壁が生まれつき無く、普通ならば交わることのないその二つが同じ血管を巡っているために病弱なのだそうだ。

一歳の頃には首都の大きな病院に移され、発作が出ると腕に薬を打たれた。まだ小さい私の腕が穴だらけに成る度、母は目を腫らして泣いていたそうだ。

そして、発作の中でも五つの時のものが一番ひどかった。私の病はしゃがんでいると幾分か楽になるものなのだが、その時の私もその姿勢で一人、積み木遊びをしていた。

日頃よく気に掛けていてくれた看護婦が、黙ってじっとしたままでいる私のことが気になった

らしく、隣に座って私の顔を覗き込んだ。すると私は苦しそうに胸を抑えたまま脂汗を流していたらしく、すぐにその看護婦によって手術室へと運ばれた。

体の成長を待って姑息的な治療をしていた医師たちも、この時ばかりは腹を決めたそうだ。

その日のうちに私の胸は大きく切り開かれ、死に最も近付いた時が訪れた。

臨死体験と言うのだろうか。私は手術の間、天の国を垣間見た。

ひらけた場所に風光る大地が延々と続いていたのを覚えている。

ポツポツと現れる湿地からは清らかな湧水が顔を出し、まるで碧空を写す鏡のようであった。遠くの空を鷺のような白い鳥が飛んでいく。彼らが音もなく羽ばたくたびに、水面に波紋が広がった。私はその鳥を追いかけたくなった。裸足のまま、原っぱを駆けた。こんなに思いっきり走ったのは生まれて初めてだった。腕を大きく左右に振って、胸は後ろに反らした。鼻から吸い込む空気が冷たくて気持ちがいい。軽い体は疲れを知らず、ままならない呼吸に苛立つこともなかった。パシャパシャと足で水の鏡を踏んでいくと、右足の方の水底に、何かの影がよぎった。気になって見ていると、どうやらそれは人影のようであった。……誰かが私を覗いている。私は迷わずに桶の底ほどの大きさしかない湿地の中に、ズブズブと顔を入れてみた。もしかしたらこうすることで何か見えるかもしれないと思ったからだ。水底は暗く、視界が悪い。しかし、両肩が水に濡れたあたりで底から赤い二本の紐が海蛇のように伸びて来るのが分かった。紐は私の頭を絡め取ると、そのまますごい勢いで引っ張った。びっくりとした私はその紐から逃れようとした。

しかしそれは尚も強く、私の頭を絡め取ったのだ。赤い紐は熱を孕んで熱く、水の中は息がもたなくて苦しかった。
嫌だ、嫌だ。せっかく綺麗で気持ちのいい場所に来たのに。どうしてまた苦しい思いをしなければならないのか。
そんな私の思いとは裏腹に、赤い紐は無情にも私の体を天の国から引きずり堕とした。
そして気がついた時には、私は病院の天井を見ていた。
ぐるりと視界を巡らせると、母が私の頭を腕に抱いていた。
この日以来だろうか、私はいつかあの天の国に還れることを人知れず夢見るようになっていったのは。
「そうですか……。そうですか……」
翁は瞳を閉じて、私の言葉を噛み締めるように頷いていた。祈るように組んだ両手を額に当て、私からは自分の顔が見えないようにしていた。泣いているのかもしれないと、私は直感的にそう思った。
「あぁ、今日も日差しが強い。東の方、貴方は平気なのですか？」
翁は立ち上がりながら、そう言って衣の袖で顔を拭った。
「いや、私はそれほどでもないよ。そんなに暑いならば、私に構わずその大層な浅葱の衣を脱いでしまったらどうだろう」
「この衣ですか。そうですね、これはここに来た時に御所様から一着だけ頂いたものですが、風

に飛ばされる心配もありませんし、そこの枝に掛けておきましょう」
翁は至って簡素な、そこいらの草を編んで作ったような腰紐を解いていく。この腰紐に対して、翁の浅葱色の衣は繊細な糸で緻密に織りあげられており、日の光に淡く透ける様が何とも美しい一品だった。どんな技術を使っているのだろうか、縫い目が見あたらない。
……御所様。そういえばこの言葉は杏の実も口にしていた。一体なんのことだろうか。それは人なのだろうか。
「一つ聞いていいだろうか。御所様とはどんな人なのだろう……」
後ろを振り向くと、そこにはもう誰もいなかった。
翁は木の裏で着替えているのだろうか。そう思って枝をかき分けるが、どこにも人影はなく、ただただ杏の林が広がるばかりだった。
「「逝ってしまった……」」
「「あぁ、逝ってしまった……」」
「「あっさりとしたものだ……」」
風に乗って杏達の声が聞こえる。先程まで翁が居た場所には簡素な腰紐だけが残されていた。
「「御仁よ、お礼を申し上げる」」
私が最初にもいで、左手に持ったままになっていた杏の実が、静かにそう言った。
「「先生はこの地から旅立ってゆかれた。今はもう、あの空の彼方にいらっしゃるだろう。ありがとう。これも貴方のおかげです」」

初めの礼儀を欠いた話し方とは打って変わって、杏は謹しみを持った態度で私にそう言った。
「待ってくれ、私は何もしていない。只話をしていただけだ。あの人は何処に行ったんだね。もうここには帰らないのかね？」
「ここにはもう二度と、帰ってこられません。貴方の言葉が先生の心を解きほぐしたのです」
杏はそう言うと、私に翁の話をしてくれた。
先生は、この丘に初めていらしたとき、とても思いつめた顔をされていました。しばらく我々とお話をするうちに、あるとき先生はこうおっしゃいました。「私は決めることに疲れていた」と。
この地は長く居ればいるほど、俗世の記憶を忘れていきます。そういう土地なのです。ですから先生がどんなことに心を痛めていたのか知るには、初めのころの言葉に頼るほかありませんでした。
先生の話を皆で紡いでいくと、先生は人の生き死にを決める立場にいらしたようです。何か特殊な生まれの方か、選ばれた偉人だったのでしょうか。世俗に疎い私達には分かりません。しかし、人の生き死にを決めることが出来る人など、そう沢山はいるはずがありません。ですから私達は、あの方を先生とお呼びすることにしました。先生はどうやらそんな役目に、人生のほとんどを費やしておられたそうです。
「一つ決めれば二つ決めねばならない。私が決めなければそれもまた決めたことになり、私の言葉が人の痛みの大きさと、命の長さの物差しになる」

とも、譫言のようにおっしゃっていました。そうしてあるとき、私たちにこうお聞きになりました。「天の国はあるのだろうか」と。きっと先生は関わった命のことを思い、そうおっしゃったのでしょう。ですがそれを見たことがない私たちには、お答えすることができませんでした。歯がゆくも時が流れていくうちに、貴方様が現れ、その答えを出してくださいました。

杏の実は一息にそう話し終えると、再び感謝の言葉を口にした。有り難う。林の中からも、降り注ぐように杏達の感謝の言葉が続く。

しかし私はこの話を聞いてすっかり縮み上がってしまっていた。

「俗世と言ったか、それに私のことを生者と言っていたな。もしやこの地は死んだものが流れ着く場所なのか。なんということだ。それならばこうはしていられない。私は早くここを出なければ」

私が今まで彷徨い遊んでいた場所はそんなに恐ろしい所だったのかと思うと、体中を寒気が襲った。

「「ここの丘をまっすぐ下ってください。そうすれば美しい湖が見えてまいります。その方向に歩いて行かれれば、あるいは帰り方を知る者がいるかもしれません」」

臆病な私は杏の話を聞き終えると、すぐさま歩き始めた。杏の言葉を頼りに丘を下っていく。

そういえば昔の言葉で杏林というものがあったなと、ふと思い至ったが、意味を思い出せなかったので諦めることにした。

蔓薔薇の咲く湖のほとりに来た。
深紅に薫る薔薇の花達は、花びらの一枚一枚が完成し尽くされた形をしており、まるで神様の造形物のように完璧な姿をしていた。
麗しいかんばせを支える蔓はしなやかに絡み合い、蔦を取り巻く荊棘は何人も近づけさせぬような鋭さをしている。
地上にもこんな花があるのだろうか。
まるで欠けたところが見当たらないような薔薇の花は、どこか現実味が無く、それでいて空虚な存在であった。
薔薇を眺めていると、湖の近くに人影が現れた。私は咄嗟に地面に伏せる。
「誰」
荊棘の茂みの奥から涼やかな声が聞こえた。
霧がかった湖の水面に波紋が広がる。目だけを動かして人影を観察する。空気を震わせた声の持ち主は、白い衣を纏った少女だった。
ここから覗き見た少女の顔は、かなりの上玉だった。
年の頃はまだ十代の半ば。細い柳眉をひそませ、桜桃のように熟れた唇を、きゅっと固くつぐんでいる。
怒っているのだろうか。丸みの残る頬がわずかに紅潮していた。
「また花のくせにおしゃべりしているのね。少しは黙らないと、海の水を巻くわよ」

少女は感情を抑えた声で、しかしはっきりとした敵意を感じさせるような厳しい声で、辛辣にそう言い放った。

「「私じゃないわ」」

あまりに驚いたので体が飛び跳ねた。

自分の伏せている近くから、別の誰かの声が聞こえたからだ。

少女はこちらに視線を向けている。しかし、蔓薔薇に隠れた私の姿は見えていないようだ。

「嘘をつくのね。私が一番嫌いな嘘を。こんなことをするなんて、もうどうなってもいいということかしら」

くすくす。くすくす。

誰のものとも分からない嘲笑が風に舞う。少女の怒りを煽るように、足元の薔薇が囁いた。

「「お馬鹿さん」」

少女がかっと瞳を見開く。そうして真っ白な袖を振り乱しながら、辺りの薔薇を怒りのままに踏みつけにしていく。

少女の体を溶岩のように熱い憤激が支配しているのが分かる。せっかくの愛らしい瞳は釣り上がり、口元は怒りで歪んでいた。

動きに合わせて揺れる髪は亜麻色だし、哀れなほどに噛み締めた歯は小さな象牙の彫刻のようなのに、どうしてこうもこの子は痛ましいのだろう。

私の窃視にも気が付かず、衣の裾からなめらかな太ももが露わになるほど、少女は大きく足を

振り上げる。荊棘を踏み続けた踵は次第に血液がにじみ始めていた。一方吹き飛ばされた花々はというと、阿鼻叫喚といった風でもなく、冷たく突き放すような笑い声を漏らすばかりだ。
「あはは。あはは。なんにも知らないお馬鹿さん」
「黙れ！」
意地悪な薔薇に翻弄された少女は、とうとう泣き声にも似た悲鳴を上げた。そうして足元の地面を蹴り付けると、そのまま何処かへと走っていってしまった。
少女の影が霞の向こうに完全に消えたことを確かめ、私は足元の小さな声の主達に話しかけた。
「随分ひどいことをする」
話を聞きたかったのであまり露骨にならないようにしていたが、目のない薔薇にも私が眉をひそめていることが分かったらしい。
「お怒りにならないで、東の方」
「驚いた。私が東から来たことを知っているのかい」
「存じております。東の方」
「でも私を踏みつけたのはあの子の方なのに」
「私を咎められるだなんて」
「酷い人」
足元から囁くような優しい声が方々から聞こえる。薔薇は私を酷い人となじっておきながら、誘うように甘い声をだした。まるで猛り狂っていた少女のことなど、もうとっくに忘れてしまっ

たかのように。
　どうやらここの薔薇達は、自分たちのことを大きく一纏めに「私」と称しているようだった。私の知りたいことを、この「私」達は知っているだろうか。
「これは申し訳なかった。どうか許して欲しい。今度からは言葉を改めるよ。お尋ねしたいのですが、貴女はこの場所から出る方法を知っていますか？」
　薔薇達は私の態度に機嫌を良くしたようだった。私の声に応えるように、口元に一番近かった薔薇が、花びらの締りを綻ばせた。まるで怪しく微笑んでいるかのようだ。
「「貴女と呼んでくれるのね。嬉しいわ」」
　そう言うやいなや花弁の奥からひたり、と蜜を漏らした。私はそれが地につく前に指ですくってやる。これにも薔薇は機嫌を良くした。続いて蜜に濡れたままの人差し指で、重なる柔らかな花弁の縁を優しくくすぐってやった。
　くくくく。喜びに喉を鳴らす音が聞こえる。
「「あぁ、いい気持ちだわ。でもごめんなさい。貴方の質問の答えは誰も知らないの。でも、それ以外のことならなんだって答えるわ」」
　そう言って私の指に蔓を絡めた。全然頼りにはならないが、嘘はついていないようだ。
「そうだな、では、貴女はどうして私のことを知っているのですか？誰かからお聞きしたのですか？また、貴女はどうしてここに咲いているのですか？」
　帰り方が分からなくとも、どうやって此処に来たのか尋ねれば活路が見いだせるかもしれない。

そう思った私は少し質問を変えてみることにした。しかしまさかこんな不可思議な土地で敬語を使わされるとは思わなかった。使ってみれば存外、様になるものだ。
「「私はここに長いことといるの」」
「「ここに在るものは、人以外はみんなそうよ」」
「「毎日星が流れるでしょう。日が昇って、雲が泳ぐでしょう」」
「「そうこうしていると、私の足は何処までも地を這って行って」」
「「遠くのことまで何でも分かるようになるの」」
「へぇ、じゃあその自慢の足を見せてくれないかい」
思わず地の言葉で軽口を叩くと、指先にチクッとした痛みを感じた。人差し指にはぷっくりとした血の玉ができている。どうやら蔓に生えた荊棘に刺されたようだ。
「怒ったのかい？」
薔薇達があんまりにも要領の得ないことばかり交互に囁くから、少し遊んでみただけだというのに。今のはあんまりにも失礼な発言だったようだ。
「「地の底を這っているのだもの」」
「「お見せできないのが残念だわ」」
そうして薔薇達がだんまりを決め込んでしまったものだから、私は少し焦って、ご機嫌取りをすることにした。
「不誠実な真似をしたね。謝るよ。言葉遣いもこれこの通り直すから、どうか可愛い顔をむけて

はくれないでしょうか」
平身低頭、仏様を拝むように手を合わせると、私の手を人質にとっていた蔓の荊棘がなりを潜めた。この湖の薔薇は女のように面倒で恐ろしい。
次に言葉を発したのは私の膝小僧辺りの薔薇だった。
「「私は嘗て、私達だったわ」」
「私達？」
「「星が流れるでしょう。日が昇って、雲が泳ぐでしょう」」
「「そうこうしていると、私達の境は曖昧になって」」
「「そうして、私は、花の私の一部になったの」」
「……？貴女は、もとは違う誰か達だったということですか？」
「「少し難しかったかしら」」
薔薇は先程少女をからかっていたときとは違い、どこか何年も生きているものの霊妙さを感じさせる声で囁く。
「「初めにここに来た私なら、今はちょうどあの子の踏みつけた辺りにいるわ。あの私なら、或は助けになれるかもしれない」」
私は薔薇に言われるがまま、目的の薔薇を探すことになった。嵐の後のように荒れた花の群れを掻き分けていく。意外なことに、薔薇はあちこちバラバラな方向に倒れていたが、どれ一つとしてちぎれたり、潰れたりなどしていなかった。

「「もし、東の方。良ければ私の体を支えてくださらない？」」
そうこうしていると、湖に最も近く、水面の際に咲いている一輪の薔薇が声をあげた。
「これでいいのかな」
私はくたりとした茎に石の支柱を付けてやり、乱れた花弁を手のひらで整えてやった。
「「あぁ、気持ちがいい」」
「貴女は初めにここに来た花だったらしいね。どうして自分がここにいるのかが分かるかい？」
「「きっとあの林に近い方の私がそう言ったのね。東の方。残念ながら私は最初の一輪ではないわ」」
さっきまでいた場所の薔薇たちよりも、この湖の畔に咲く薔薇は落ち着いていて、年長者らしい風格のある話し声をしていた。
「違うのかい。私には貴女が他とは違うように見えたのだけれど」
またしらみつぶしに最初の一輪を探さねばならないのだろうか。これは骨が折れる。そう思って腰を上げようとした時に、引き止めるような声が聞こえた。
「「東の方。それでも私が、この私の中でも一番の古参であることは本当よ。貴方の知りたいことにも、ある程度なら答えられるわ」」
その時、近くを風が吹いて、湖面を揺らした。気がつくと一匹の蝶がひらひらと彷徨い出ていて、薔薇達の上を遊ぶように飛んでいた。きゃあきゃあ。明るい笑い声を上げながら、花達は蝶を迎い入れる。

「「あの手の浮気者も、この年になれば可愛いものだわ。それよりも東の方、私は私よりももっと古参の、その者はさらに古参のものに聞いたのだけれど、私、いえここに住まう植物はみな、同じ罪で花や植物の姿に変えられたらしいわ」」

「罪……貴女達は元は人間で、何かしらの罪によって人ではなくなったというのかい？」

「「えぇ、そう。このことを知っているのは、ただし、人以外の者達だけよ」」

「どうして人以外の者はそんなことを知っているんだい？」

「「……それはもう、私たちが助からないからよ」」

霧煙る湖の方から、辺りを覆うように霞がかかる。

「「同じといっても、根幹の部分が共通しているだけ。理由はそれぞれらしいわ。杏には杏の、私達には私達の罪がある」」

石の支柱からゆっくりと起き上がった薔薇を、霞が迎えに来た。

「「さようなら東の方。私を、他とは違うと言ってくれてありがとう」」

そういって首からぽとりと落ちると、そのまま水底へと沈んでいった。

薔薇と別れた私は一人湖の淵を歩いていた。

そういえば、あの少女はどうなったのだろうか。全く戻ってこない。まさか湖に溺れているのではないだろうか。心配になった私は、少女が走っていった方角に向かって追いかけてみることにした。

薔薇の蔓の及ばないあたりまで来ると、膝を抱えて歌っている少女を見つけた。どうやら怒り

は随分と落ち着いたようだ。
声に耳を傾けると、少女は高く小鳥のような声で、叶わない恋を歌っていた。
大昔に流行った大衆曲の、ありふれた恋の歌。
中々艶かしい内容の歌だったはずだが、この清廉な空気を纏った少女が歌うと、まるで違った歌のように聞こえてくる。
まるで恋を知らない者が、恋に焦がれている歌のように。
「もし、ちょっといいだろうか」
歌い終わった少女に声をかける。
私が近くで聞いていると知らなかった少女は、小動物のように体をびくつかせると、脱兎のごとく逃げようとした。
「待ってくれ、勝手に歌を聞いていて悪かった。道に迷ってしまったんだ」
少女は訝しそうな顔をして、木陰からこちらを伺っている。警戒しているのだろう。一定の距離を取って近づかないようにしている。
「道に？そんなこと言われても、私はここから出たことがないわ」
「そうか、それならいいんだ。違うところも見てみるよ」
これ以上怯えさせては不憫だ。足早に退散しよう。そうして踵を返したが、予想に反して、少女は私の傍らまで飛び出してきた。
「待って、もう行くの？」

少女が縋るような目をしてそう言う。どうやらこの少女も、珍しい人間の客と話がしたいようだ。

私はしばらくの間だけ、少女の話相手になることになった。

「今の曲は私も知っているよ。病院の看護婦もたまに歌っていたからね。君はあの歌が好きなのかい？」

少女は、あれは知らない歌だが、気が付けば口ずさんでいると言った。

同じ歌を知っている者に会えたのがよほど嬉しかったのか、私が湖の岩に腰掛けると、近くまできて座ってくれるほどまでに打ち解けた。

「君はあれが何を歌っているのか分かるのかい？」

意地悪な質問だっただろうか。少女は私の質問の意味が分からなかったらしく、鼻白んだ顔をしていた。首をかしげた様が、本当に小鳥のようで可愛らしい。

「……この歌を、あの薔薇達の前で歌うと笑われるの。ここに来たときからずっとそう。私のことを鼻で笑って、馬鹿にするの」

私に対する態度とは違い、薔薇は少女に優しくないらしい。膝を抱えて座る少女の体は小さく、哀れみを誘った。しかし杏の林の翁とはえらい違いだ。こんなところにずっと居なければならないとは、なんとも酷な話だ。

「私、あの薔薇達が嫌い。意地悪で、みんなおんなじようで、それになんだかいやらしいんだもの」

私はどきりとした。なぜだか理由はわからない。しかし、安心しきって無垢だとばかり思っていた少女が、敏感にそういったことを感じ取っていたのだということに、恐れを抱いたのかもしれない。

卑しい私は、自分のそうした部分が表に出ないように細心の注意を払った。気がつけば、この少女に嫌われたく無いと思い始めていたのかもしれない。

「思い出せないけれど、私、昔もそうだった気がする。あの薔薇みたいな女の人が嫌いだったわ」

おや、と思った。この少女は翁よりも幾分か記憶が残っているらしい。この地に来て、まだ日が浅いのだろうか。

うつむいた少女の顔を覗き込むと、白い衣の下に浅葱色の衣を着ているのが分かった。翁の衣と同じ色だ。襟を抜かないで、なるだけ肌が見えないように着ているため、今まで気づかなかったのだ。

少女の禁欲的ないじらしさが、固く閉じた蕾に似ていた。偶然だろうか、ここの薔薇には一つとして蕾が無かった。

「自分は価値があるものだから、人を傷つけても構わないっていう、高慢なところも大嫌い。……でも、知ってるわ。私にもそういうところがあるの。私、自分が綺麗だって知っている。だから私も、私が嫌いだわ」

少女は落ち込んでさらに小さくなってしまった。

私に出会う前は一人こうして、湖に泣いていたのだろうか。

私には子持ちの妹がいる。そのせいだろうか、なんとなくだがこの少女の思う所が分かるかもしれない。

やはりこの子は少女なのだ。聖人に成れない自分を責めている。

年若いものが願望する大義名分だとか、完全無欠の正義だとか、固く凝固で揺らがないものしか、きっとまだ知らないのだろう。

不実な心や邪な感情も、潔白や清純さと交われるのだとは思いもよらないのかもしれない。

少女が嫌いだと言った女達も、きっとありふれた只の女達だ。彼女達のいい部分も、憎めない部分も、少女は知らずにここに来てしまった。だから自分が許せないのかもしれない。

「こんなことまで話せたのは貴方が初めてよ。きっと、運命の人ってあなたみたいな人のことを言うのね」

無邪気な少女はそう言って、私の手を握ってくれた。私をこんなにも信じてくれる少女が愛しい。

くすくすくすくす。

どこで聞いていたのか、風に薔薇の嘲笑が混じった。

「「馬鹿な子供。おっかしい」」

「「きっとなんにも知らないのね」」

「「男はみんな嘘つきなのよ。その人の指をご覧なさいよ」」

少女ははっと青ざめた顔をして握った私の手を見た。

視線の先にある私の指には、花の蜜がついていた。
怨嗟を凝らしたような目が私を射抜く。握っていた手は大きく振りほどかれ、少女は涙に濡れながら、どこかへと去っていってしまった。

楓が紅く色付いた森の中に来た。
踏みしめる足元の落ち葉は湿っていて、きっと辺りに漂う濃い霧のせいだと思った。
「もし、どうかされましたか？」
後方に茂る森の中から声が聞こえた。
紅葉の枝をかき分けて、桐の行李を担いだ男が現れた。深く刻み込まれた笑い皺や、つぶらで従順そうな瞳が、この壮年の男の心根の良さを語ってくれているかのようだ。男はかなりの大柄だったが、人好きのする雰囲気を纏っているため、威圧感などはまるで無かった。
「道に迷ったんだ。良ければ案内を頼めるだろうか」
男は黄土色の衣を纏っていた。その重ねの中には白色、浅葱色の衣を着ているようだ。今まで出会った者の中でも一番の厚着をしている。男は口元に手を当て、しばらくの間逡巡すると、森の中を一瞥してこう言った。
「これから夜が来ます。ここは肌寒い土地ですから、今夜は私の家に泊まって、明日の朝案内をさせてはいただけないでしょうか」
男はなんだか急いでいるようだし、夜中まで付き合わせるのも悪い気がしたので、男の提案を

了承することにした。
「なんだか済まないね。私はここの気候には疎いのだが、少し離れた所でも全く気温が違うらしい。ありがたく甘えさせていただくよ」
私がそう言うと男はほっと安心した顔をして、此方です、と獣道の中を進んでいった。
男の背中の行李を眺めながら、楓の森の中を歩いていく。先程男が言っていたように、辺りは黄昏時を迎えていた。甘露酒をこぼしたような空には宵闇が潜みはじめ、得体の知れない化物でも隠して飼っているかのような不気味さを放っていた。
「ところで君、その背中の行李には何が入っているんだね？」
「これでございますか。これは病気の両親に食わせるための獣の肉が入っております」
男があまりに自然にそう言ったので、私はこの男に両親がいるということに対して、さして疑問を抱かなかった。
「肉か、なるほど、君ほどの大男ならば、きっと御両親も食うものに困らないだろうな」
男の黄土色の着物の裾から伸びた腕は逞しく、ごつごつとしていて、兎や猪、果ては熊さえも仕留めてしまえそうな豪腕であった。
男は、少し困ったような照れ笑いの顔をした。
「滅相もない。毎日両親が元気になってくれるようにと願っておりますが、不甲斐ないもので、私が取れる肉など本当に僅かなものなのですよ」
「そうかね、それは意外だ。しかし、ここいらには獣があまり居ないようだから、君が獲物に困

るのも無理からぬことかもしれないね」
なんとなく、男が落ち込んだような顔をしていたため、慰めるようにそう言った。
「お優しい方だ。お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」
「私かい？残念だが名前は忘れてしまったんだ。人は私を東の方と呼ぶから、君もそう呼ぶといい」
森を抜けたところに開けた場所が有り、沢山の落葉に埋もれるようにして小さな荒屋が佇んでいた。
「父さん、母さん、今帰ったよ」
荒屋の中には薄汚れた衣類の塊が二つ鎮座していた。何年も洗濯せず、着たきりで汗や垢が染み込み、近づけば古い油の嫌な臭いがしそうな服が、何枚も何枚も重なってできているかのような塊だ。
「これが御両親かい？」
「はい、寒さは体に毒ですから、こうして何枚も厚着をさせているのですよ。あまり厚着をさせているものだから、埋もれてしまっていますけれどね」
そう言って男は担いでいた行李を肩から下げると、台所に立って湯を沸かし始めた。慣れた所作で竈に火を付けると、汲んでおいた桶の水を大きな釜の中に注ぐ。
そして男は、先ほどの行李の中から、一つの包みを出した。
うっすらと血で染まった白い布をめくると、血抜きをされた桃色の肉が姿を現した。もうすで

に細かく割かれており、真っ白な皮が肉を覆っていたから、毛抜きも済ませてあるようだ。
ふと、昔何かの本で読んだ猟師が言っていたことを思い出した。
毛を抜き、皮を剥いで血抜きが終わった後の肉は、宙ぶらりんの存在なのだそうだ。
もはや肉を削がれた動物の一部でもなく、かと言って料理という手を加えていないが為に、我々の手元にも堕ちていない。
つやつやとした瑪瑙石のような、よくわからない物体。
誰にもなれず、何にもなれない。
嘗ては誰かだったもの、これから何かに変わるもの…。
男が狭い家屋の中で台所仕事を始めたため、一気に蒸気が立ち込めてきた。ひさしを上げれば問題ないのだろうが、男は寒気が入ることを気にしていたから、どうすることもできない。それに男が両親と呼ぶ者の為に度々こうしてきたためだろうか、部屋の中は黴臭く、敷かれた畳は嫌な湿り気を帯びていた。
このまま中にいれば気分が悪くなってしまいそうだ。
「私は少し外に出ているよ」
引き戸をわずかに開けて外に出た。外の空気は幾分かましだった。男は夜が冷えると言っていたが、それはいつからなのだろう。
その時だった、ひらりと楓が舞い落ちてきたのは。私は肩に引っかかった一枚を指で摘んだ。
「そういえばここの植物達は、やけに静かだね。今までの所では花や杏が喋ったものだよ。それ

とも何か理由があって話せないのかい？」
内緒話をするように摘んだ楓に話しかけると、葉の半分ほどが紅く色付いたその体が、ブルブルと震えだした。
「「…東の方。ここにいてはいけません」」
嗄れた喉から絞り出したような声で、楓は続けた。
「「元いた場所にお戻りください。鼠が夜を連れてくる前に、早く東へお戻り下さい」」
「それはどういうことだね。鼠とは、一体なんのことだい？」
楓はくぐもった呻き声を上げると、それきり押し黙ってしまった。
「いかがされましたか。東の方」
「！」
楓との会話に夢中で、背後まで男が迫っていることに気がつかなかった。私は話さなくなった紅葉を咄嗟に胸元に隠した。
「あぁ、紅葉ですね」
男は私の傍らにしゃがみこむと、大きな手のひらいっぱいに地面に重なり落ちた紅葉を拾い集めた。思わず嫌な予感がして、男に尋ねる。
「君はそれをどうする気だね」
「どうすると言われましても、火にくべるのですよ。枯葉はよく燃えますから、たまにこうしてすくっては竈に入れています」

「信じられない。君には紅葉の声が聞こえないのか。君のような人には初めて会ったよ」
男は口を開けて豪快に笑うと、少年のように澄んだ眼差しでこちらを見つめてきた。
「貴方は面白い方だ。東の方。紅葉が口をきくわけがないでしょう」
男はそう言って、いくらかの紅葉を攫っていった。
家の中に入ると、もう鍋の支度が出来ていた。囲炉裏針に掛けられた鍋の湯は沸騰しており、ぐつぐつと中で肉が煮えていた。
特に出汁もとっていない簡素な鍋のようだ。しかし、やけに灰汁が多い。
「どうぞ、東の方。先に召し上がって下さい。私は両親に食べさせねばなりませんから」
男は三人分の椀を運んできた。すると、椀を目の前にして、衣服の塊たちがもぞもぞと蠢き始めた。あまりの驚きに、上ずった声が出そうになる。
「はい、母さん。熱いから少し冷ますね」
男がそう言って椀の中の肉を吹いて冷まそうとすると、悪臭を放つ服団子の中から、にゅっと木乃伊のような片腕が伸びてきた。
「！」
カラカラにやせ細り、垢が溜まって真っ黒に汚れた皮膚。そこにはうっすらと産毛が生え、爪は汚く黄ばんでいた。
腕は男から椀をひったくると、辺りに汁を撒き散らしながら服の中に引きずり込んだ。しばらくすると服の中からじゅるじゅると汁をすする音と、くちゃくちゃと肉をはむ音が聞こえ始める。

中に生き物がいたことだけでも驚きだったが、まさかこのようなものが男の両親の正体だったとは。

当の男はこんなことには慣れっこだったのか、黙って立ち上がると、台所から布巾を持ってきて畳に散らばる汁を拭き取っていく。

そして奇怪な腕の持ち主は肉をひとしきり舐め終わったのか、椀を畳の上に投げ出した。

男はその椀に再び鍋の肉をよそってやると、ついでに隣りの服の塊にも肉をついでやる。今度は男が肉をつぎ終わらぬうちに、腕が伸びてきて、椀を毟り取られていた。

「父さん、そんなに焦ると火傷をしてしまうよ」

今度もやはり気味の悪い腕が服の中から伸びていた。関節はありえない方向にねじ曲がり、肘から先が妙に長く、弓なりにしなっていた。

私はこの場から逃げ出したい気持ちでいっぱいになった。しかし、この男は、奇怪な両親の姿などまるで気にならないかのように甲斐甲斐しく世話を焼いている。

男は腕が求めるがままに肉をついでいくのだが、腕は男のつぐのが遅いとみると、男を押しのけて直接鍋から肉を掴み始めた。これほどまでにおぞましい光景を、私は嘗て見たことがない。

彼らに気を取られていて気がつくのに遅くなったが、男の顔にはびっしりと玉の汗が浮かんでいた。

「君、なんだか少し顔色が悪いね」

「そうでしょうか。…そういえばなんだか寒気がします。もっと沢山服を着なければいけません

ね」

そう言うやいなや、男の体をどこからともなく現れた真っ赤な衣がふわりと覆った。しかし男は先ほどよりも尚苦しそうにして、腹のあたりを抑えている。

「腹が痛むのかね。少し見せてくれないか」

「いえ、結構です。私には構わず、どうか召し上がって下さい」

そうはいってもこんな状態の男を放ってはおけない。

「いいから、見せてくれ」

強引に男の手を払いのける。すると、太く逞しかったはずの腕があっけなく外れた。

「……そんな」

目の前に広がる光景をどう言い表していいのかわからない。私はやはり夢でもみているのだろうか。浅葱、白、黄土、赤。何層にも重なった衣を一気にはがすと、どうしたことだろう、剥き出しになった男の肋骨が見えた。しかも骨が覆うべき内蔵も筋肉もなく、男の体の中は伽藍堂だった。視線を下にずらすとやや湾曲した背骨が見え、その下の骨盤は大きな盃のようで、やはりあるべき中身がまるでなかった。

私は猛烈な怒りを感じた。この男が感じていない分のものまで、一手に引き受けたかのような激しい怒りだ。

「肉か、なるほど、君ほどの大男ならば、きっと御両親も食うものに困らないだろうな」

私がそう言うと、男は苦しみながらも、また少し困ったような照れ笑いの顔をしてこう言った。

「滅相もない。毎日両親が元気になってくれるようにと願っておりますが、不甲斐ないもので、私が取れる肉など本当に僅かなものなのですよ」
男は私に気取られぬよう、ずっと痛みを堪えていたのだろうか。体を暴かれて以降、虚脱したように壁にもたれかかったままでいる。
男はしばらく何も喋らなかったが、観念したのか、ぽつりぽつりと干からびた唇から言葉を紡ぎ始めた。
「今日は横腹の残った肉と、太ももを自分で切り落としてきました。腕の肉を削いでは包丁が握れませんから、これは最後にしようと決めていました。しかし太ももはいけませんでしたね。すっかり体が冷えてしまいました」
「そんなことは喋らなくていい。君はどうしてこんなことをしているのだね。あの両親が、君にそうしろと言ったのかね？」
男は無言のまま首を横に振った。
「違います。東の方。これは生きていた頃の名残です。私は生前、秋山幸樹という名でした。この秋山という男はよく、誰かが喜ぶ顔を見たいがために、度々似たようなことをしていたような気がします。何も肉を食わせていたわけではありません。しかし、自分を捧げていた、という意味では同じだったのかもしれませんが」
「生きていた頃の記憶がはっきりあるのかね。ここにいる者たちは皆、自分が誰であったかも、何をしていたかも忘れていくというのに」

「はい。私には沢山の兄弟がいました。日々の大半を弟や妹達の世話に費やしていたと思います。両親も老いて病がちでしたから、私は随分といいように使われていたような気がします」
「それだというのに君はこんなところに来てまで、誰かの犠牲になっているのかね」
「東の方。それは誤解です。私は今、なんと言いましょうか、下の兄弟達には申し訳ないと思うほどに、幸せなのです。何故ならば両親は私だけを必要とし、私に全てを求めてくれます。何も労いの言葉はくれませんが、それは生前となんら変わりないことですし、私の肉を彼らが美味そうに喰む間だけ、私はやっと、両親の子供になれるのです」
　男は血の気の失せた顔でそれだけ言い終えると、苦悶の表情を浮かべた。明らかに生前と今の状況を混濁させていることだけは、私にも分かった。
「惜しむらくは、私の体に限りがあることです。私が捧げることができなければ、両親はもう、私のそばには居てくれないでしょう。その時が近づいてくるのが、私は何よりも恐ろしい」
　男は背を丸めて泣いていた。それは自分の体さえも支えきれない胎児のようでもあり、弱々しく無垢な子供が震えているようでもあった。
　私にはこの男の気持ちが分からなかった。何かを犠牲にしなければ掴めないものに怯える気持ちも、必要とされなければ愛されないという不安も。それは私が恵まれた子供だったからにほかならないからなのだろうか。思えば、私の体は病がちであったが、当たり前のように大切にされ、自分という存在を肯定され続けてきた。それはどんな子供にでも当てはまることではないのだろうか。

いや、疑いもせずにそう信じていられること事態、私とこの男の間にある隔絶は大きいのかもしれない。

その時、胸元に潜ませた紅葉がふるふると震え始めた。手元まで急に見えなくなったので、この時になってやっと夜がやってきたことを知った。

「「痴れ者め」」

胸元から躍り出た紅葉の葉が、怒気を含んだ声を男にぶつける。

「「お前の血でこの森の土は穢れた。本来ならば我らに落葉はありえないというのに、お前の流す血が我々に死期をもたらした。なんという業腹。浅はかさよ。赤い衣を纏ったお前には、相応の罰が下るぞ」」

途端、荒屋を突風が襲った。獣のよう肉を貪り続けていた二つの塊が、本来の姿を現した。

「あぁ、いけない！」

男の悲痛な叫びも虚しく、崩れた衣の山から、大量の鼠の群れが逃げ出し始める。地を這う黒い群れは嵐の前兆を感じ取ったかの如き勢いで、暗い夜の林へと走ってゆく。男は私の横を滑り抜けると、足をもつれさせながら鼠の群れに覆いかぶさった。

「行かないでくれ、私のそばに居てくれ！」

危機を悟った鼠は男のことになどには目もくれず、その背や腕を濁流のように駆け抜けていく。

そうしてもう二度と、戻ってくることは無かった。

先程紅葉は、男に相応の罰が下ると言っていた。それがこれなのだろうか。打ちひしがれたよ

うに床に臥した男は、放心したまま動かなくなってしまっていた。
男は鼠と分かっていて、両親の替りにしていたのだろうか。
私は何も言葉をかけてやることができなかった。
この男が充足を知らないように、私にはこの男の空虚を埋められないと、痛烈に感じている自分がいた。
鼠が去った後の林は朝日が差し込んでいる。結局最後まで、私はこの地で寒さを感じることは無かった。
男を一人残して、私はこの森を引き返すことを決意した。出発前に改めて見渡した紅葉の林は、今までとは違った顔を見せ始める。
屍人の血で染まった赤色は、なるほど男の家を中心に深まった色をしていた。
メキメキ……。背後から何かが軋む音がする。振り返ると、先程男といた荒屋から、屋根を突き破るように大きな楓の樹が生えていた。
空を衝くように大きいのに、どこか頼りなげで、大きく伸ばした枝も陽の光を一身に受けているというよりも、庇護を求めて伸ばされた腕のように悲しい。
足元を見下ろすと、地面を連なる蟻の群れや、葉虫達がその木に惹かれるように行進していくのが見えた。
「「大きな木が生えたよ」」
「「とても甘くていい匂い」」

「「あの木は蜜が流れているんだって」」
「「なんでも傷を付ければいいらしい」」
「「それなら細かく沢山の傷をつけて、そうしてあの木が枯れるまで、その蜜を飲み干すんだ！」」

粉雪の舞う雪原に辿り着いた。
しんしんと降る雪は地上にある全てを真っ白に覆い隠し、ただただ静かに、辺りの音を奪いながら降り積もってゆく。
ここには深海のように暗い空と、発光するように明るい雪の原っぱが何処までも続いているだけだ。
しばらく歩いていると雪原の中に、何か鏡のようなものが落ちているのが見えた。近づいて覗き込もうとすると、その周りには真っ白な孔雀が一匹佇んでいるのが分かった。
孔雀は鏡のようなものをじっと覗き込んでいる。私が傍らに立とうとも、見るのを止めようとしない。
近くで見ると鏡のように見えたのは氷の地面に開けられた穴だった。どうやらこの足元には遥かに広い湖が広がっているらしい。真っ白い孔雀は長い尾羽を雪に垂らしながら、何かを待ちわびているかのように氷の穴を覗き込む。
「何を見ているんだね？」
孤独なその背中に声を掛けた。

しかし、孔雀は私の言葉を無視し、尚も穴の底を覗き続ける。
ふと、穴の中の水面に、人影が見えた。その影は次第にはっきりとした形となり、遂には汽車の中に座っている男の子を映し出した。
バサッ
孔雀がその白い羽を広げる。畳まれていた尾羽が大きく放射状に広がり、目玉のような模様がたくさん現れた。孔雀はその男の子から一向に目を離さない。しかもよく見ると、目玉のような羽模様の一つ一つには、本物の目玉がついており、その黒目も一斉に男の子を注視している。
私は孔雀の横顔をしばし見つめた。細く長い首はすらりとしていて、華奢な体は触れれば折れてしまいそうであった。
「あの子を見ているのかい？」
慎ましい嘴は固く結ばれ、真っ黒な瞳からは表情が読み取れない。孔雀はただただ、降り積もる雪に体を覆われながら、静かに男の子を見ていた。
男の子は、年の頃は妹の息子ほど、初等学校に通い始めたくらいだろうか。頬には丸みが残っていて、柔らかそうな小さな手を膝の上で握り締めている。まだ幼さの残る年頃だろうに、気丈な表情をしておとなしく椅子に座っていた。付き添いの者はいないようだ。
疲れているのだろう、時折こく、こくと船を漕いでは、はっとして目を覚ますのを繰り返している。見ていて何ともはらはらとする光景だ。
車窓から見える空は暗い。夕日は完全に顔を隠している。この子はどこに行くのだろうか。こ

んなに暗い中を、たった一人で。
しばらくすると、浮浪者らしい男が男の子の隣を陣取った。こんなに客もまばらで、席も空いているというのに、わざわざピタリと隣に座ってくるのが妙だ。汽車が次の駅で停車した。客のほとんどがその駅で降りていく。男の子は停車しているにもかかわらず、深い眠りの中にいるようだった。体が椅子の背もたれに深く沈んでしまっている。この様子では、当分の間は自分で起きそうにもない。
夜の汽車は男の子と浮浪者を運んで動き始める。そうして五つの駅を通り過ぎ、三つの街を超えていくと、車掌が終点を告げるアナウンスをした。すっかり夢の中にいる男の子は口を開けて、寝息を立て始めている。
ぬっと、浮浪者の垢まみれの手が、男の子の鞄に伸ばされた。私はあっと声を上げていた。危ない、坊主、早く起きるんだ。届かない声を張り上げる。浮浪者は男の子の鞄を引っ張り、幼い体を揺さぶった。「おい、坊ちゃん、終点だぞ。おい、おい」耳元の大きな声に驚いて、男の子が目を覚ました。寝過してしまったことよりも、目の前にいる歯が欠けて、垢で汚れた顔に驚いたようで、男の子は鞄もそのままに、夜の駅に転がり降りてしまう。そうしてそのまま宵闇の中に飛び出していってしまった。
水の鏡はゆらぎ、元の水面にかえると、それきり男の子の姿は映らなくなった。
今のは一体何だったのだろうか。見ていて何とも、危なっかしい男の子だった。
孔雀は尾羽を畳んで、ゆっくりと瞳を閉じた。

そうして、クワーン、クワーン、と二度鳴くと、雪のように崩れていった。
粉雪が、孔雀の居た場所に降り積もっていく。長く美しい首筋も、真っ白な体も、もうそこには跡形もない。まるで初めから何も無かったかのように、雪は変わらず降り積もっていく。
「「今のが最後の逢瀬でした」」
どこからともなく声が聞こえた。歌うように美しい声だ。
辺りを見渡しても誰もいない。まるで雪が話しているかのようだ。
「君は誰だ。一体どこにいるんだ？」
「「私は貴方のすぐ近くにいます。今は貴方のちょうど足元、地に積もる雪となって存在しています」」
「もしかして、君はさっきの孔雀かい？」
「「えぇ、一寸前、私は孔雀でした。その前は一人の人間でした」」
「君はコロコロ姿を変えるんだね。一体次は何になるんだい？」
「「私はこれ以上、姿を変えることはありません。私に次はありませんもの。湖の薔薇も似たようなことを言っていませんでしたか。私が言っているのは、それと同じことです」」
水辺の薔薇を思い出した。首から落ちて、湖に沈んでいった花。
嘗て私は私達だったと、もう助からないと、あの薔薇は言っていた。
「「この世はなんとも不思議なものです。私は死んでこの地に流れ着きましたが、死者の住む地でもう一度、かわいい坊やを見ることができました。人の姿の時は二つの目で、鳥の姿の時は沢

山の目で、あの子が五つになるまで見ることができました。私は満足です」

虚空に鈴の音のような声が響く。

満足だったと、雪になってしまった孔雀は言ったが、私の心には二人分の悲しみがあった。

「訊いてもいいだろうか。君は人の姿の頃、ハッキリと自分の記憶があって、ひどく体が寒くなかったかい。そうしているうちに衣がどんどん重なっていって、そして赤い衣を羽織ったとき、君は人ではなくなったんじゃないか？」

この地に来ていくつもの場所を巡り、植物や人と話しているうちに、私の心にはしこりが出来ていた。この孔雀であった雪ならば、私の疑問に答えてくれるかもしれない。

……もしも私の考えが正しいのならば、この地は何とも恐ろしい。

「「ご自分でお気づきになったのですね。東の方。

初め、ここの雪たちはあまり穴を見てはいけないと忠告してくれました。しかし私は、赤い衣を羽織るまでそれを止めませんでした。そうして気がつくと、孔雀の姿になり、今では消えるのを待つ一欠片の雪となり果てました。

この地は死者の留まる煉獄。天の国に至る入口です。ここの雪達はなんでも知っています。湖の薔薇よりも、多くの意識が溶け合って個を成しているからです。

この地は魂の浄化の為にあると御所様が言っていました。御所様はこの煉獄の者に衣を授ける役目を担っている方です。授けるだけで、決して取り除いてくれることはありません。

傷ついた魂は澱が溜まり、重くなって空に還れないため、記憶を薄れさせ、悲しみを忘れさせ

ることで、その澱を取り除くのだそうです。

しかし、中には記憶を手放せぬ者もいます。そういう者の多くは、魂の傷を癒す義務を放棄したとされ、自然と体が冷えていき、衣を重ねられます。寒さの警告に気がつかず、これが浅葱、白、黄土、赤と重なったとき、罰が下されます。天の国の門は閉められ、ここで生前の業を体現した畜生や植物として暮らすのです。杏の実は生き辛さを病のせいにした者が、薔薇の花は生き急いだ女が、楓の葉は自分より他人を甘やかした者が、雪の粉や白い孔雀は人を信じれぬ者が陥る業の姿です。

それから後は業が深まれば深まるほど、小さく意思のないモノになってゆき、それも終わると自然と無になっていきます。中には煉獄の理に耐え切れない者もいます。薔薇が湖に身を投げたでしょう。ああいう者は地の国に堕ちます。そうしてどうなるのかは、誰も知りません。

天の国の神様はお優しいのでしょう。自分を大切にしないものを、天の国にはお通しにならないのです。

雪ほどの大きさになってしまった私ですが、あと暫くの間は人であった時の記憶を手放さずに話すことができます。他に聞きたいことがあれば、なんでも仰ってください。あの子を心配してくれた貴方にお礼がしたいのです」

孔雀であった雪は、知りうる限りの知識を私に話してくれた。

ここの雪は孔雀を心配していただろう。こうした知識も十分授けられていたかもしれない。しかし、それが分かっていても、この孔雀は見ることを止められなかったのだろうか。

「君は、どうして記憶を手放せなかったんだい？」
危なっかしく、一人で夜の道を走る男の子を思い出した。
あの子はこれから、どんなふうに生きていくのだろう。
「……そうですね、あの子がまだ小さい時に死んでしまったから、名前もたくさん呼べなかったからでしょうか……」
雪の声はだんだんと小さくなっていき、そうして何も喋らなくなった。雪の大地に立っているのは私だけになった。
粉雪は尚も降り続ける。
孔雀の最後の鳴き声が、耳に残った。

孔雀の氷の穴から、何本もの赤い紐がしゅるしゅると出てきた。私は、今度は迷わずそれらを掴むと、冷たい水の中へと身を沈める。
水の中を潜っている間、どこからともなく声が聞こえてきた。
低く、重々しい声は、こう歌っているようだった。

夏の丘に立つ人よ。
杏の林に立つその人は、衣を脱ぎ捨て空の果て。

春の湖畔に泣く人よ。
薔薇の荊棘に泣くその人は、女の業から逃げられぬ。

秋の野山に臥す人よ。
楓の森に臥すその人は、子供の業から逃げられぬ。

冬の大地に見る人よ。
氷の鏡に見るその人は、母の業から逃げられぬ。

目を覚ますと、私は管やチューブだらけになって布団に寝ていた。
妹の話によると、私は丸一年もの間、昏睡から目覚めなかったらしい。発作でもなく、こうしてただ目が覚めないでいるなどということは今までに無かった為、私の最期を感じた家族が、代わる代わる見舞いに来ていたそうだ。
今日は妹と甥が私の見舞いに来ている。妹の持ってきた果物を甥が食べたそうにしていたため、蜜柑を一つ取って剥いてやった。
甥は最後に見たときよりも随分背が伸び、顔も精悍になっていた。子供とは、少し見ていない間にこんなに大きくなるものなのか。目覚めて以来、見るもの全てに新鮮な驚きと感動があった。
蜜柑の白い筋を剥がしながら、甥がつぶやく。

「お母さんね、あと、おじいちゃんとおばあちゃんもね、みんな心配してたよ。みんな伯父ちゃんの手を握ってた。伯父ちゃんが全然握り返してこなくても、みんなずっと握ってたよ」
甥は筋を取り終わった蜜柑を嬉しそうにほおばりながらそう言った。妹は私の洗濯物を片付けながら、甥の頭を小突く。
「あなた、来年は小学校なんだから、そんなにお行儀悪くしちゃダメじゃない」
仕事に忙しい妹は、更に私の世話や子供の世話を一手にしている。
小学校に通い出せば、甥を学童に預けなければならないと昔言っていた。
「…へぇ、もうそんな年か。それなら俺が勉強を見るよ。学校が終わったならここに来るといい」
私がそう言うと、妹がお化けを見たような顔をしたので、私は少し笑ってしまった。

（医学部保健学科三年）

第六回東光原文学賞優秀賞受賞作品

HENSHIN

吉川　真悟

0.

昔から女癖が悪くいつも母を泣かしていた。

とかだったらどんなによかっただろう。残念なことに、僕の父は真面目で、仕事熱心で、おまけに愛妻家だった。特別忙しいときを除き、毎晩七時には必ず帰宅し、一本だけ缶ビールを飲みながら、くだらないテレビ番組で笑っていた。小さいころから一緒に遊んでくれた記憶もたくさんあるし、母と喧嘩しているところなんて一度も見たことがなかった。

だから、父がもし浮気をするとすれば、それはもうどうしようもないものになるのだろう、とずっと思っていた。それは決して遊びなんかではないのだろうと。決して、「つい」、や、「出来心」で、なんてレベルのものではないのだろう、と。間食もはさまないような真面目人間がする浮気なのだ。きっと致命的なものに違いない。

父は時計を売る仕事をしていた。高級腕時計から、安っぽい壁時計まで、時計と名のつくものなら何でも売っていた。当時その街に一つしかなかったその大きな時計専門店で、父はなかなか

の有名人だった。プレゼント用から仕事の備品まで、客の提示する用途にぴったりの時計を選びぬき、提供する。修理も速くて正確。父のほかにその時計屋さんには三人の従業員と一人の店長がいたが、うちの父はその中の誰よりもずっと評判がよく、知名度も高かった。しかし父のすごいところは、そのようなある種〈逸脱した〉人間的な完成度を、まったくひけらかさない上に、計算された（としか思えない）人間臭さで覆い隠してしまっているところにある。誰も父を責めることはない。恨むこともない。「世渡り上手」なんて言葉では陳腐に聞こえてしまうくらい、父は世間を上手に、しかも堂々と、それでいてひっそり、歩いていた。そんな父を尊敬せずにはいられなかったし、そんな父に何かしらの欠点があるなんて考えてもみなかった。例えば高級ホテルのベッドの下を覗き込んで、埃がたまっていないかなんて確認しないように。

今になって考えれば、彼の欠点は明らかだ。

優柔不断。彼の物腰の柔らかさは、何かを決定するための時間稼ぎにすぎない。彼が提示してくる豊富な選択肢は、彼の中で決定することの出来なかった事項を列挙しただけにすぎない。彼の頭の中にある篩の網目は、驚くほどに、きめ細かいのだ。複雑に絡み合って、ランダムで、それでいて脆い。彼は何とかして選択肢を減らそうと勢いよく篩を揺さぶり、底にこびりついた無数の可能性と格闘する。

彼はおそらくそれを、愛だと勘違いしていた。

1.

その人に初めて出会った日のことは、今でも鮮明すぎるくらいはっきりと覚えている。あれはまだぼくが小学校四年生の時だ。

彼女は、田所さんという、どの町にも必ずいそうな、ごくありふれた名前だった。なんとなくだけれど、例えば父の携帯電話の液晶にもしも「田所さん」と表示されていたとしても、まったく浮気なんて疑わないような気がする。田所という苗字にはそういった、不思議な無害感がある。

だからぼくは、街でばったり会った父が、隣に居た女の人を「田所さんだよ」と紹介したときに、何の疑いもなく「仕事でなんか用事のある人なんだろう」と思ってしまった。その時間帯は、父は普通に勤務中であるはずだったから、なおさらだ。何か子どもには想像もできないような、のっぴきならない事情で、父は時計屋を留守にしているのだろうと、勝手につじつまを合わせてみる。田所さんは決して絶世の美女ではなかった。こぢんまりとした個人経営の居酒屋で、火曜と木曜だけバイトをしていそうな、そんな記憶に残らない顔だった。薄く茶色がかった髪に、なんとなくはっきりしない目鼻立ち。着ていた洋服についてはほとんど覚えていない。ただうっすらと、六月のあまり気持ちがいいとは言えない気候には不釣り合いなほど、厚手のカーディガンを着ていた記憶がある。それが彼女をますます野暮ったい印象にしていたのだ。次に会ったときに果たして僕は彼女に気付くことができるだろうか？　何歳くらいなのかの目算をつけることすら難しい。三十すぎと言われればそう見えるし、大学生と言われれば、ありえなくはないと思ってしまう。

「こんにちは」と田所さんは愛想よく言った。
「どうも」とぼくは短く返す。初対面の大人の女性に対する接し方がいまいち分からない、微妙な年頃だった。「お父さんのお知り合いですか？」
「ああ、そうだよ」答えたのは父だった。
自分の世界は学校と家庭で回っていると、本気で思いこんでいた小学生のぼくは、同様に、父の世界も仕事と家庭で回っていると、当然のように考えていた。つまり、父の知り合いということは、仕事関係の知人なのだと、ぼくはさっさと結論付けて疑いもしなかった。
「秀一はどうしたんだい？」ぼくが一人で街までやってきていることに父は疑問を持ったようだった。
「本を買いに来たんだ。今日発売のがあるんだよ」ずっと楽しみにしていた児童書の最新刊を購入した帰りだった。
「バスできたの？」田所さんは、無理やり会話に割り込むかのようにぼくにそう問いかける。
「うん、バスと市電で」本当は、校区外に出るときは保護者の誰かと一緒でないといけなかったことを思い出し、少し不安になる。父はそんなことでぼくを怒るなんてことはしないが、田所さんが信用に足る人物かどうか、ぼくはまだ判断しかねていた。学校の先生でも友達のお母さんでもない、大人の女性は、その頃のぼくにとって、まだ未知の存在だったのだ。
そんなことを考えている一方でぼくは――本当になぜなのかが分からないのだけれど――そのぱっとしない女性に、今まで感じたことのない感情を抱いていた。まだ小学生だったぼくは、そ

の感情をうまく言葉に置き換えることができなかったが、今の僕なら迷わずこう訳すだろう。

背徳的な感情だった。

田所さんは、なんだか物憂げな表情でこちらを見ていた。まるでぼくの中に得体のしれないものがパンパンに詰まっていて、それがいつ飛び出してくるかわからず困っているような、不安と恐怖と闘っているような表情だった。

ぼくも困った。なぜ彼女が、ただの小学四年生に過ぎないぼくに対して、そんなに複雑な感情を抱かなくてはならなのか、皆目見当もつかなかった。

もし今の自分がそんな状況を客観的に観察できる位置から眺めているとしたら、そんな田所さんの心境を一字一句違わずに解説することができたかもしれない。ようするに彼女は後ろめたさでいっぱいだったのだろう。

破裂寸前なのは彼女の方だったのだ。

いずれにせよ、ぼくはその不思議な女性に、自覚もないまま魅了されていた。

田所さんという女性と出会ったことは、母には言わなかった。もちろん父のためなんかではない。理由は自分でもよくわからない。ただはっきりと言えるのは、田所さんに対する感情が、背徳的なバツの悪さでなんだかどろどろとしていることだった。なんとなく、そういった感情を誰かに抱いてしまったという事実は、母には言わない方がいいような気がしたのだ。

それは本能だった。自分の中で着々と膨れ上がっていく巨大な何かが、ぼくにそういう選択をさせたとしか言いようがない。

田所さんという女性について、母には何も言わないこと。ぼくはこのことをいつまでも自分の胸に留めておかなくてはならなくなる。

2.

空梅雨も甚だしく、六月だというのに信じられないくらいの快晴が毎日続いている。じっとりとした汗をシャツが吸いこんで非常に不快だ。エアコンが壊れたのは去年の夏だったはずなのに、いつの間にかもう季節は一巡していた。

僕の部屋は狭い。明らかに小学生低学年が使用することを想定して設計されている。確かにこの家が建ったとき僕は小学一年生だったが、今はもう高校生だ。明らかに寸法のあっていない服を無理やり着ているような、違和感と恥ずかしさをうまくごまかしながら生活しなければならないのだ。何年も自分の居場所であったこの部屋を、ふと客観的に眺めると、とても自分とは不釣り合いで、ちぐはぐに見えることがある。そんなとき、僕はとても焦る。自分の部屋に自分の居場所が無いという不思議な現象と対峙して、身動きが取れなくなる。

僕は父の部屋から持ち出してきた様々な本を仕分けていた。面白そうなものはもらいうけ、特に興味の持てないものはまとめて古本屋へと持っていくつもりだ。あまり物のない僕の部屋が、久しぶりにごちゃごちゃと散らかっていて、なんだか少し楽しい気持ちになる。僕は本来モノに囲まれていたい性分の人間なのかもしれない。

父の部屋はまとまったスペースがとれないくらい、書架がびっちりとそびえたっていたため、

少しずつ僕の部屋へと運び出した。小さい頃は、その書架の圧迫感が恐怖の対象だったため、父の部屋にはほとんど入ったことが無かった。父は、本を読むときは決まって自分の部屋で読んだ。リビングでは新聞しか読まなかった。僕が騒いでいたりテレビの音がうるさかったり、そういった事情もあったのかもしれないが、なんとなく今ならわかる。

父はひとりでいるのが好きだったのだ。本を読むのは、自分を隔離された空間へいざなうための口実に過ぎなかったのだろう。今、僕の目の前に積まれているこの大量の書籍たちは、ただひとりになりたいがためにかき集められた、紙きれの束なのだ。何とも切ない気持ちになる。

ミステリーから哲学書、はたまたコミック本まで、ありとあらゆるジャンルの本が積み上げられている。僕はもともとあまり読書を好まない人間なので、純粋にぱっと見た感じ面白そうなものだけを選別していく。驚いたことに、本はどれも実に面白そうだった。読書経験の浅い僕が、タイトルと表紙だけで直感的に「読みたい」と感じることができるものばかりだった。父のセンスに感謝する。

いや、ひょっとしたら、父は僕がいずれ読むかもしれないという可能性を考慮したうえで、本を買っていたのではないか。

例えば、二冊の本を手にして、どちらか一方を買おうと悩んでいたとき、より「僕が興味を持ちそうな方」という尺度で選んでいたとしたら。まあ、ただの想像なのだけれど、なんとなく、僕の父ならやりかねない気がした。

結局、百冊以上あった本の中から、古本屋へと持っていくことになったのはせいぜい十冊前後

だった。おそらく過半数は持っていかねばなるまい、どうやって持っていこう、という心配は杞憂に終わってほっとしたが、今度は残った本をどうやって保管するかを考える番だった。あの書架はおそらく取っ払ってしまうだろう。この部屋に移そうとも考えたが、ただでさえ小学生サイズのこの部屋が、さらに狭くなるのはごめんだった。

とりあえず応急処置として、部屋の片隅に本を積み上げる。それだけで部屋の広さが半分くらいになってしまったように感じる。

父の部屋をもらってしまえばいいのか、と一瞬だけ考えた。しかし、すぐに頭の中で却下する。父の部屋は父の部屋であり、僕の部屋は僕の部屋であるべきだ。それは機能の話ではない。それは生活する空間としての概念の話だ。父の部屋に未だ充満している、「父」にまとわりつかれながら生活するだなんて、考えただけでもぞっとする。

確実に読まないであろう本を、紙袋に放り込んでいく。文庫本が多くて助かった。

全部に値がつくか分からないが、とりあえず売りに行くだけ行ってみようと、僕は腰を上げる。

3.

だらだらと汗をかきつつ、学校の反対側に位置する古本屋へと歩いて向かう。

小学生の頃、僕が大人になる頃には、一般に本と呼ばれるものは、全てデータに加工されて、パソコンなどで読むものになっているものだと思っていた。もちろん僕のオリジナルの発想ではなくて、確かそんな設定のアニメを見たのだ。そのアニメの中では黒板は液晶で、生徒は一人一

台、薄いノートパソコンを配給されている。これじゃあみんなすぐ目が悪くなるだろうな、といらぬ心配をしていたことまで覚えている。

しかし現実はどうだ。僕は分厚い紙の束を、ひいひい言いながら運んでいる。世の中は僕が思っているよりもずっとゆっくりと進んでいるようだった。でもこれは、科学の発展の限界などではなくて、なんだか不思議な自制心みたいなものが、あえて発展を拒否しているような、そんな気がするのだった。どうでもいいのだけれど。

「いらっしゃいませー。こちらお売りいただけるものでしょうか？」

店に入るとすぐさま、茶髪でメイクをばっちり決めた女性の店員さんが声をかけてきて、僕から紙袋をむしり取る。よく訓練の行き届いた警察犬のようだと思った。

番号札を渡されて、僕は店内を徘徊する。あまり本や漫画に興味はない方なのだが、幸いにも、この店には音楽関係のリサイクル品も売られている。

あまり物色する時間も与えられずに、アナウンスが査定終了を告げた。あれだけの量の本を、こんな短時間で目利きするこの人たちは、やはり訓練の行き届いたひとつの軍隊なのだ、と思った。

カウンターに行くと、一冊だけこちらに差し出された。

「申し訳ありません、こちら一点、お値段をお付けすることができませんでした。お持ち帰りになられますか？　こちらで処分することも可能ですが…」あまり買い取り拒否を告げるという作業に慣れていないのか、声が少し上ずっていた。以前何かトラブルでもあったのだろうか。

差し出された本を見ると、カフカの「変身」だった。
見た目はとてもきれいだ。どうしてこれが買い取り拒否されるのだろう。少し悩んで、僕はその本を持って帰ることを告げる。
「それでは、こちらに必要事項をご記入願います」
僕は使いすぎてインクの出が悪くなったボールペンで、自分の個人情報をだらだらと書く。

家に帰ってカフカの「変身」をぱらぱらとめくる。別に、どこかのページが破れているとか、ひどい染みがあるとか、そういったことは皆無だ。どうしてこの本だけ買い取りを拒否されるのだろう。あの店はフランツ・カフカを毛嫌いしているのだろうか。僕はこの本を読んだことが無かったけれど、いくら眺めても読みたいという気持ちが全くわき起こらなかった。文庫カバーの裏に書いてあるあらすじを読んでも、読み終わった後に幸福な気持ちになれる要素が一つも見当たらなかった。物語というものは、読書に何らかの形で幸福をもたらさなくてはならないと思う。せっかく現実から切り離されたフィクションの世界に旅立ったにもかかわらず、リアルでも体験しないような失意のどん底を味わう必要はないのではないか。
僕は幸福に飢えている。
僕の目には、その薄い文庫本の表紙も、装飾も、タイトルのフォントでさえ、まるで僕の中に残る幸福の搾りかすまでも、ひとつ残らず吸いとってしまおうとしているかのように見える。著者近影に写るフランツ・カフカの顔は、まるで機械的に人間の命を奪う死刑執行人のように見え

た。職務上必要のない感情を、すべてどこかへと寄付してしまったかのような、そんな底のしれない表情だ。

読んでみようか。

なんとなく、そう思った。古本屋がこれを買い取ってくれなかったことに、なんだか数奇な運命を感じてしまったというのもある。

時計を見ると午後四時を回っていた。これから特に何の予定もない。母はパートに出たっきりまだ帰ってこない。

「……」

僕はページをめくり始めた。

4.

ある時から、父は週末になると、頻繁に外出するようになった。普段から、あまり家族で外出することの少ない家庭だったし、僕も世間一般の小学生とは少し感覚がずれていて、休日は家でのんびりしたい人間だったので、正直なところ、書斎で本を読んでいた父が外に出ただけで、僕たち家族の関係には何の変化も訪れなかった。こう事実だけ書くと、なんだかそもそも僕たちは家族として破綻していたかのようだけれど、僕はとても幸せだった。父に何の不満も感じていなかった。そこが我が父のすごいところなのだ。口数の多い方ではなかったけれど、彼の発した言葉の一つ一つが、体の奥深くまで沁み渡り、時間がたっても温かく僕を包んだ。その存在が、ま

るで海のように我が家に漂っていた。
もちろん、僕は母のことも愛していたし、今でも愛している。いつもニコニコしていて、僕がどれだけ子供じみた言動で困らせても、絶対に僕を否定せずに、さりげなく道を正してくれた。
しかし、どこかで僕の家族は父を中心に構築されているのだという強い思いが、母の存在感を薄めさせていた。母が、――つまり鳴沢静流という女性が、自分の母親でなかったとしても、僕の家族は続いていくのではないかという、漠然とした予感だ。例えば途中で何かの事情で母親が変わってしまったとしても、鳴沢家は鳴沢家であり続けるのではないか。父はそういう存在だったのだ。いわば父は鳴沢家のエンブレムだった。もし仮に、中身がぐちゃぐちゃになってしまったとしても、父というエンブレムが貼り付けられている以上、鳴沢家は、そして僕は、幸福であり続ける。

「しゅういちくん」
後ろから名前を呼ばれて、ぼくは自転車をこいでいる足をとめた。週に二度の、習いごとの帰りだった。時刻は八時をまわって、あたりはもう真っ暗だ。小学校四年生がこんな時間に一人っきりというのは物騒な気もするが、そこまで遠い場所でもなかったので、ぼくは自ら両親に頼みこんで、自転車で行き来することを決めたのだった。
振り返ると、女の人が立っていた。なんだか記憶に残らない服装をして、なんだか記憶に残らない顔をしている。しかし、ぼくは一目で誰だかわかる。

「私のことを、覚えてる？」彼女は遠慮がちに言った。
「えっと……」ぼくは口ごもった。本当は分かっているはずなのに。
田所さんだ。
ぼくは強烈に覚えていた。その薄幸そうな微笑も、眼鏡の奥の一重にしては大きく見える瞳も、低くて鼻孔の目立たない鼻も、忘れられるはずがなかった。
「無理もないよね。あの、一度街で会ったことがあるんだけど」
「……ああ」ぼくはそこで思いだすふりをする。自分が彼女のことを覚えていることを悟られたくなかった。本当は、街で一度だけ会ったことのある大人の女の人のことなんて、忘れているべきであったのだと、きちんとわかっていた。
「どこか行ってたの？　あ、弓道教室の帰りかな？」
「え、あ、そうです」ぼくは驚いた。「どうして分かったんですか？」
「それ、弓でしょう？」田所さんはぼくの背中を指さして言った。ぼくは少し恥ずかしくなる。頭が悪いと思われてしまっただろうか。それにしても、弓だと分かったな、と同時に感心もする。
「田所さん、弓道詳しいんですか？」あまり弓道に対して開けた知識を持っている人と出会ったことが無かったので、ぼくは少し興奮した。
田所さんは驚いた顔をして僕の顔を見つめた。細くて頼りない沈黙が空気を満たした。心臓の音がやけに大きく聞こえる。そのことを彼女に悟られてはいないか心配になる。
「ううん、ごめんね。弓道は詳しくないの。あなたのお父さんが、前にちらっとそんなこと言っ

てたから、それで」田所さんは妙に明るい調子でそう言った。
「そうなんですか」ぼくは少し落胆する。「田所さんは、今日はお父さんに用事があってきたんですか？」
「いいえ、たまたま歩いてたら君を見つけて、声をかけてみただけよ」
「そうなんですか」ぼくはまた繰り返す。なにか気のきいた返しの一つもしたいところだったけれど、なにも思いつかない。
「あの」なんとなく流れそうになった気まずい沈黙を回避するために、ぼくは見切り発車で口を開いた。「あの、田所さんは」
「うん？」田所さんは優しい顔を作る。なんとなくその表情が作りものであることがはっきりとわかる。
「田所さんは、父さんの仕事の仲間なんですか？」当たり障りのない会話の切り口を選んだつもりだった。
　しかし、田所さんはうろたえた。ぼくは焦る。うろたえさせるつもりではなかったのに、なんだか聞いてはいけないことを聞いてしまったんだろうか。
「それ、お父さんが、そう言ったの？」伏せ目がちになって、田所さんはそう尋ね返す。
「いえ、ぼくが勝手に、そうだと思って」すみません、とぼくは謝る。田所さんはますます慌てて、謝らないでよ、と言った。
「そう、お仕事でね、ちょっと知りあって。時計を直してもらったのよ」

そう言って、田所さんは自分の左腕の袖をまくって見せた。銀色で、つるんとしたシンプルなデザインの時計がはめられていた。父が修理したのだろう。

「すごく大事な時計でね、どうしても直したくって…。完璧に直って返ってきたときはすごく嬉しかった」

田所さんはまるで、クリスマスプレゼントを友達に自慢する少女のように笑った。ぼくはよっぽどその時計が好きなのだなあ、と幸せそうにほほ笑む彼女を見て胸の奥がずきずきするのを感じていた。

「あ、ごめんなさいね」田所さんは、我に返ったように、慌てて袖を元に戻す。「長々と立ち話しちゃって。気をつけて帰ってね」

「ありがとうございます。田所さんも、お気をつけて」

そう言ってぼくは自転車にまたがる。

そしてあることに気付いて、猛烈に恥ずかしくなった。ぼくは彼女のことを覚えていなかったはずなのに、最初から彼女を名前で呼んでしまっていた。致命的なミスだった。ぼくのつたないポーカーフェイスを、彼女は心の中でくすくす笑っていたのだろうか。ぼくが彼女を強く意識していると、気付かれてしまっただろうか。

そのことを父に話すだろうか。

これから父と顔を合わせるたびに、なんだか気まずい思いをしなくてはならないことを考えると、やり切れない思いだった。

しかし、そんな心配は無用だった。
この二週間後に父は死んだ。

5.

どこかの薄暗い倉庫の中に、三人の人物がいる。
一人は人物と言っていいのか微妙なラインだ。おそらくライオンと思われる、いかめしいマスクをかぶり、仰々しい赤い鎧のようなものを着ている。手にはかろうじて人間らしく五本の指があるが、その一本一本の指の爪は、触っただけで怪我をしそうなほど鋭い。
一人は髪の長い、きれいな女性だ。ロープでぐるぐる巻きにされて、地面に横たわっている。構図的に、ライオンマスクに捕らえられたのかもしれない。誰も何も説明してくれないが、彼女からはただならぬ人質っぽさが溢れている。
もう一人は、やたら顔の整った青年だ。なんだか百人以上いた候補者の中から選ばれてここに居ます、とでもいうような、謎の自信に満ち溢れた顔をしている。ライオンマスクときれいな女性に対峙するかのように、勇ましく立っている。
「ふふふ…。逃げずにここまで追ってきたことは褒めてやろう。しかし、たった一人で乗り込んでくるとは、相当の愚か者か」ライオンマスクが青年に言う。思ったよりも普通の、どこにでもいそうなおじさんの声だった。
「マモル！　私のことはいいから、逃げて！」女性が叫ぶ。てっきり気を失っているものだと思っ

ていたため、少々びっくりした。
「君を見捨てて逃げられるわけがないだろう！」美青年が叫ぶ。「絶対に助け出してやる！　そう約束したんだから！　俺は約束を守る男だ！」突然の宣言に笑ってしまいそうになるが、彼はいたって真面目にそう叫んでいるようだった。
「貴様のような貧弱な人間に何ができる！」ライオンマスクが高らかに笑う。
「ふん、笑っていられるのもあと数秒だ」青年が吐き捨てるように言う。
そして、男の子なら誰しも一度は真似たことのあるであろう、とあるポーズをとる。強烈な光とともに、腰に真っ赤に染められた機械のようなものが出現した。
「ま、まさか貴様！」ライオンマスクが慌てだす。その後ろで女性も目を見開いている。
「マモル、あなたひょっとして…」
静かな沈黙が流れる。カメラが彼ら三人の表情を舐めるように映していく。
「変身！」青年が叫ぶ。先ほどとは違った、優しい光とともに、青年の体が変化を始める。テンションの上がるバックグラウンドミュージックがけたたましく鳴り響く。
「なんと！」
そこに現れたのは、巨大な毒虫だった。六本足で大きなあごを持ち、黒ずんだ全身が油でテカテカしている。よく見ると背には二枚の大きな羽がある。家庭で最も忌み嫌われるあの害虫を連想させた。
さきほどまで美青年だったその毒虫は、粘ついた鳴き声をおぞましく発しながら、ぬるぬると

蠢き出した。
高々と女性の悲鳴が上がる。

そこで僕は目を覚ました。
居間のソファに横になっている。目の前のテレビの中では、きちんと昆虫を模したヒーローが、スタイリッシュに戦いを繰り広げていた。今日もヒーロー界は、きちんとシナリオ通りのようだ。僕は胸をなでおろす。
時計を見るともうすぐ九時を回ろうとしている。朝か夜か一瞬判断がつかなかったが、もう一度テレビ画面を眺めて合点する。日曜日であることを考えれば、許容されるレベルの寝坊だった。
急に息苦しくなって体を起こす。変な体勢で眠ってしまったせいで、体のあちらこちらがきしきしと痛む。首を上手く曲げることができない。どうやら寝違えてしまったらしい。首を手で丁寧にかばいながら立ち上がると、体の上から、ばさり、と音を立てて何かが落ちた。
カフカの「変身」だった。落下した衝撃でカバーが外れ、つるつるてんとした、無地の表紙があらわになる。
「……」
そこには、黒い油性ペンで文字が書かれている。
昨日何気なくカバーをはずしてみて気付いたことだ。これが、この本が買い取り拒否を受けた理由だろう。文字はぐにゃぐにゃに歪んでいて、なんと書かれているのか判別できない。ただ、

インクの質感から、それが遥か遠い昔に書かれたものではないことは確かだった。

まるで誰かが、死ぬ前に最後の力を振り絞って書いたようだ、と思った。殺人現場に残されたダイイングメッセージのような切実さが、そこからはにじみ出ていた。暗号か何かなのだろうか。選ばれたごく少数の人間には理解できるような、裏のメッセージが込められているのだろうか。だとすれば、誰にあてて、誰が書いたメッセージなのだろう。

普通に考えれば、それは本のもとの持ち主である父が書いたということになる。しかし、僕は父がこんな、鉛筆を始めて握った幼児がいたずらに書いたような字ではない。わざと崩してあるのだろうか。

もしくは、彼の達筆さを存分に発揮できないような状況で書かれたものだとでも言いたいのだろうか。

例えば、今際の際とか。

6.

ある日父は夜になっても帰ってこなかった。

少しでも帰宅が遅くなりそうなときは必ず連絡を入れるし、どんなに遅くとも、日付が変わる前には帰宅していた父のことなので、真っ先に疑われたのは、何かしらの事故や事件に巻き込まれた可能性だった。仕事場に連絡すると、七時過ぎには帰路についたはずだという。

母は子どものぼく以上に激しく取り乱した。それはまるで、気合を入れすぎた舞台女優の過剰

演技のようだった。見ていて白々しさすら感じるほどに。
ぼくは慌てふためく母を横目に、淡々と本来は母がやるべき家事をこなしていた。それにすら気付かない彼女にうんざりしながら。もちろんぼくだって、父のことは心配だった。母がぼくの分まで、慌ててくれたから、冷静でいられたのだろう。見事な役割分担だった。
深夜になっても父とは連絡がつかなかったが、ぼくは翌日の学校に備えて寝ることにした。母はぼくが「おやすみ」を言ったことにすら気付いていないようだった。
なかなかやってこない睡眠欲求を待ちわびながら、ぼくは父のことについて考えた。笑っている父、怒っている父（とはいっても怒鳴ったりはしない。彼は淡々と諭すように怒る）、困っている父、照れている父、そういえば、泣いているお父さんを見たことないなあ。一つ一つの表情が、ぐにゃぐにゃとストーブの中の火のように揺らめいていた。ぼくはびっくりする。
ぼくが見たことないのは本当に、泣いている父だけだろうか。笑ったり怒ったり照れたり困ったりしている父のことを、ぼくは本当に見たことがあっただろうか。それらはぼくの妄想なんじゃないのか？
自信が持てなくなってくる。どんどん不安が押し寄せてくる。ぼくは妄想の中の父の笑顔を気持ち悪いと思う。まるで、本来の姿に戻ろうとしている別の何かのようだった。本当はこんな顔をしていないのに、無理やり形を作るから、窮屈な感じがする。元に戻ろうと必死になる。その向こう側に、本当の父の姿があったとしたら。ぼくの見たことのない、父の本当の姿があったとしたら。

お母さんは見たことあるのかな。

取り返しのつかない失敗を犯してしまったかのような、どろどろとした気だるい焦燥感にかられて、横になっているのに体が重かった。これはきっと、とうとう訪れた眠りが、ぼくを夢の世界へと引っ張っているのだ。

そう思うことにした。

次の日学校から家に帰ると、家の前にパトカーがとまっていた。一瞬、家にいるであろう母の身を案じたけれど、すぐに昨日の夜父が帰ってこなかったことを思い出した。

「……」

父に何かあったことは明らかだった。ぼくの心臓は今にも体を突き破って飛び出してきそうに高なっている。

家に入ると母の泣き声がする。ぼくは覚悟を固める。小学生には不釣り合いな、巨大な覚悟だった。ぼくもその大きさを測ることはできないくらいに巨大な、そして不格好な覚悟だった。

「鳴沢秀一くんだね？」突然後ろから声を掛けられて、ぼくは飛び上がった。

振り返ると、なんだか見た目で肩が凝っていることが伝わってきそうな、よれよれのおじさんが立っていた。そのすぐ後ろに、困ったような顔をしたお兄さんもいる。

「よく、聞いてほしいんだけど」おじさんはぼくの目線の高さまで腰を落とした。

「父が死んだんですか？」ぼくは言った。言ったはずだけれど、咽喉が震え過ぎて、ぼくの耳ま

で届かなかった。
しかしおじさんの耳には届いたようだった。一瞬驚いた顔をして、ゆっくりと頷く。
ぼくはかろうじて立っている。「立っている」という感覚はないけれど、頭が上を向いていることで、自分が立てていることが分かる。
「お父さんは、山奥の車の中で亡くなっていたんだ」
「どうして死んじゃっ…たんですか」また、咽喉が震え過ぎて自分の声が聞こえない。ぼくの頭の中では、ガードレールに激突して、血まみれの父が思い浮かんだ。
「練炭自殺ってわかるかい？」
「れんたんじさつ…」もちろんそんな言葉知らなかったけれど、じさつというフレーズが「自殺」のことであることはすぐに理解できた。
「お父さんは自殺したんですか？」
おじさんはそれには聞こえないで、自分のふところに手を突っ込んだ。そして一枚の写真を取り出した。
「秀一くん、この人、誰だかわかるかな？　お父さんと一緒に車の中で亡くなっていたんだけど」
写真を見る。そこに写っている人を見る。
ぼくは頭が真っ白になる。お昼に食べた給食が、すごい音を立てて逆流してきた。咽喉がすっぱい。横になってしまいたい。全て吐いてしまいたい。眠りたい。何でもいいから夢が見たいけど。

ぼくは質問された。
答えなきゃならない。
「…知りません」
今度は自分の声がはっきりと耳に届いた。

7.

僕はだらだらと服を着替える。太陽はもうかなり高くまで昇っていた。一日をスタートさせるには少し出遅れてしまった。朝から何も食べていないはずなのに、まったく空腹感はなかった。その代わり、ひどい倦怠感が体中をもぞもぞと這いずりまわっていた。しかし、その倦怠感は同時に心地よさでもあった。まるで初恋の人に久しぶりに会うような、うわついた気持ちだった。行きたいけど、行きたくない。

テレビでは、東京のおすすめ肉料理店を紹介していた。インサートカットされた、見るからに高級そうな牛肉が、照明の光で官能的に光っている。僕は見ただけで胃がむかむかしてくる。

姿見の前に立つと、髪の毛がぼさぼさなことに気付いた。一瞬そのままでもいいか、と諦めそうになるが思いとどまって、丁寧に櫛を入れる。軽く整髪料を使ってセットする。髪の毛に手入れが行き届くと、眉毛が乱れていることに目が向く。僕は洗面所へと向かう。伸びすぎた個所をカットし、カミソリで形を整える。少し皮膚が負けてしまい、赤くはれ上がる。幸い血は出なかった。ひげは昨日の夜に剃ったばかりのため、手入れの必要はなかった。

久しぶりに「今自分が綺麗な格好をしている」という自信を持つことができた。最近は身なりのことなんてほとんど構うことがなかったため、まるで生まれ変わったような、すがすがしい気持ちになることができた。

自分の部屋へと入る。雑然と積まれている本の中から何冊か選びぬいて、デイパックの中に突っ込んだ。机の上に無防備に広げられた二つ折財布も一緒に放り込む。

机の上に置いてあった小さな鏡で、もう一度自分の顔を確認する。ここ数日では最もマシな顔をしている。

自分の部屋を出る。玄関へと向かう。なんとなくさすがに空腹を感じたが、気のせいだということにして、家を出る。

父の葬儀には、本当に、びっくりするくらいの人たちが駆けつけた。そのほとんどが、ぼくも母も、会ったことも聞いたこともない人だった。父が家の外でどんな交友関係を築いていて、どんな人間として振る舞っていたのか、実はぼくたちは何も知らなかったのだ。家庭と仕事場をただ行き来しているだけの父からは想像もつかないような人間関係網を構築していた。

そのほとんどが、父に時計を修理してもらったという人たちだった。ただの客と店員の関係をはるかに上回る信頼関係が、この人たちを突き動かしたのだ。

母はふらふらの状態で、何とか喪主をやり終えた。見ていて心が折れそうなたどたどしさだったが、ひと仕事やり終えた母の顔はさっぱりとした表情をしていた。

「鳴沢くんの、お子さんかな？」
火葬場へと場所を変えるまでの短い休憩の時間、ぼくは後ろから声を掛けられた。
振り向くと、いかにも紳士といった感じのお爺さんが立っている。
「はい、そうですけど」ぼくは緊張しながら答える。周りの大人たちは、「父を失った少年」というイメージをぼくに当てはめて、満足そうに涙を流すものだから、ぼくは大人との会話にうんざりしていた。
「お父さん、残念だったね」お爺さんの言葉はまっすぐに耳に届いた。ぼくは「父を失った少年」という役割を捨ててもいいものか迷う。
ぼくは父に裏切られた少年で、母は夫に裏切られた妻だ。
そのデリケートな部分を隠ぺいするために、触れないように、見ないようにするために、ぼくたちに「父を失った家族」というシールを張る。
父の何が「残念」だったのか、お爺さんの言葉からは判断できなかった。
「君のお父さんは、とてもすばらしい時計職人だったよ」お爺さんはぼくを見ているようで僕を見ていなかった。ぼくの指先や、頭の中の構造を見極めて、その中に父を探しているかのようだった。「本当に、残念だった。わたしはね、悔しくてならない」
「悔しい、ですか」
「ああ、そうだ。君のお父さんはね、君たち家族を置いて、浮気相手と無理心中するような男じゃないよ。わたしが保証する」

あの女が悪いんだ、お爺さんはそう吐き捨てるように言った。
「だからね、しゅういちくん、だったかな？　君のお父さんのことを、誇りに思っていい。君のお父さんは、誰かから恨まれたり、誰かを裏切ったりするような人じゃない。君の中のお父さんとの思い出を、汚したりしないでほしい」
そう言って、お爺さんはぼくの前から去っていった。
ぼくは父との思い出について考えだす。

相変わらず軍隊のような「いらっしゃいませー」を聞きながら、僕は店内へと入る。今度は手提げ紙袋を持っていなかったので、誰も「買い取りですか？」と尋ねてこなかった。
僕は買い取りカウンターへと歩いて向かい、デイパックの中から本を取り出した。すぐさまこの間と同じ女性店員が駆け寄ってきて、「こちら、お売りいただけるものでしょうか？」と声をかけてくる。
「お願いします」と僕は答える。
以前と同じように番号札を渡されて、僕は店内へと放流される。僕は店内をうろつかず、少し離れたところでカウンターの奥を見ていた。テキパキと、僕の持ってきた本とパソコンの画面を見比べ、買い取り価格を確認している。
しばらくその作業を繰り返して、以前と同じ店員さんは僕の番号札を読んだ。
「申し訳ありません、こちら一点のみ、お値段をお付けすることができませんでした」以前と同

じように、カフカの「変身」がこちらに差し出される。
しかし、僕は、以前とは違う反応をする。
「どうして、これだけ値段がつかなかったんでしょうか」
店員さんは、驚いたように僕の顔を見る。
そして、本のカバーを外した。例の、何と書いてあるかわからないぐにゃぐにゃの文字列があらわになる。店員さんはそれを指さして言う。
「ここに、ちょっと落書きのようなものが――」
僕はその言葉を、緊張しながらさえぎる。
「だってこれ、あなたが書いたんでしょう？　田所さん」

8.

ここを出て少し進んだとこにある角を右に曲がったらファミレスがあるから、そこで待ってて。そう言われて僕は言われたとおりにやってきた。久しぶりに入ったファミレスは、僕の中のイメージとは大きくずれた空間になっていた。家族連れがひと組もいない。ファミリーレストランとは名ばかりの、学生たちのたまり場と化している。
窓際の席を選んで座った。こういう、何か重要な話をする場合は、窓際の席だと相場が決まっている。そして軽くコーヒーでも注文するのだろうか。そして相手が現れる頃には飲み干してしまうものなのだろうか。

「ご注文はお決まりでしょうか」ウェイトレス（という表現が果たして適切かわからないけれど）の女性がやってくる。
「しらたまあんみつを」僕は注文を告げる。
驚くような速さであんみつが運ばれてくる。まるで、僕が注文することをあらかじめ予想していたかのようだった。
思っていたよりもおいしかった。値段の割に味がしっかりしている気がする。それとも僕の味覚が知らぬ間に馬鹿になってしまっていたのだろうか。
窓からのぞく景色に、田所さんが現れた。仕事は終わったのだろうか。先程着ていた制服から着替えている。僕は緊張する。昔の面影が全くなくなってしまった彼女に、それでも緊張する。
「お待たせしました」まるでまだリサイクルショップの店員と客の関係が続いているかのように、田所さんは言った。僕の目の前へと腰を下ろした。
「お久しぶりです」僕はそう言って頭を下げた。「何年ぶりでしょうか」
「最後に会ったのは君の家の前だったよね、ほら、夜中にさ。弓道の道具を担いでいたんだっけ」
「よく覚えていますね」僕はびっくりして言った。あれはもう、六年も前のことになる。
「あのすぐあとだったでしょう？　秀久さんが亡くなったのは」
秀久とは僕の父の名前だ。誰かがその名前を呼ぶのを、僕は生まれてはじめて聞いた気がした。
「お葬式には来られなかったんですね」僕は思い出しながら言う。
「来られるわけないじゃない。どんな顔してお焼香すればいいの？」そう言って、田所さんは困っ

たような表情を作った。
その表情が、僕の脳裏に焼きつく、あの日の田所さんを想起させた。初めて会ったときだ。父と二人で歩く田所さんを、街で見かけたあの日。
「いくつか聞きたいことがあるんですけど」僕は食べかけのあんみつをテーブルの隅に寄せる。
「おいしそうね、それ」
「え？」
田所さんはあんみつをあごでしゃくった。「私も注文しようかな」
「ああ、おいしいですよ、味がしっかりしてて」
「それはすばらしいわね。…で、聞きたいことって？」
「まず、田所さんと父は、どういう関係だったんですか？」
田所さんはなんだかおかしそうな、泣きたそうな、怒っているような、不思議な表情になった。
「どんな関係だったと思う？」逆に質問で返される。
「僕は、父とあなたが付き合ってるんだと思ってました。父はあなたと浮気してるんだって」
「そう、なんだ」彼女は眼を伏せる。「いつからそう思っていたの？」
「はじめて二人を街で見かけたときからです」僕は正直に答える。「あの日からずっと、二人は付き合っているんだと思っていました」
そして、それと同時に、僕は田所さんを好きになった。
この人が自分のお母さんだったらいいのに、と思ってしまった。

「だから、父が死んだとき、車の隣に乗っていたのがあなたじゃなかったことに頭が真っ白になったんです」
現実を受け入れることができないほど、僕は揺さぶられた。
「あの女の人は誰なんですか？　あなたは父の何だったんですか？」
父が帰ってこなかったあの日、僕は父が田所さんと一緒にいるのだろうと思っていた。しかし、翌朝父は死に、しかも父の隣には全然知らない女の人が横たわっていた。
「もちろん、あの女の人がだれかは私は知らない。警察が調べて発表した以上のことはわからない。つまり、あの女の人と秀久さんがどんな関係だったのかは、もう誰にも分からない。ただ」
「ただ？」
田所さんは言葉をためる。
「私は、あなたのお父さんの恋人にはなれなかったよ」

「私からも質問、いい？」田所さんは自分で注文したあんみつを食べながら言う。
「なんですか？」
「あの店の店員が私だって、どうしてわかったの？」
僕は少しだけ考える。考える僕を見て、田所さんは続ける。「自分で言うのもなんだけど、昔の私と今の私、全然違うと思うんだよね。髪だって染めたし、メイクだって全然違うし。それに、ここだけの話、目元もちょっといじってるんだよね」コンプレックスだったんだ、と彼女は笑う。

自分の顔がコンプレックスだったのだ、と。

「鏡を見ても、それが自分の顔だって気付かないくらい、私の顔には特徴がなかったんだもの。けどそれは、別に生まれ持っての顔の容姿がそうさせてたんじゃないって、気付いて、少しずつ変わっていったんだけど」僕は黙って聞いている。あまりに少女めいたその悩みに少しだけうんざりした。「それなのに、どうして私だってわかったの？」

「まあ、勘ですか」

嘘だ。勘なんかじゃない。強烈に、猛烈に、僕は気付いた。売れなかったカフカの「変身」を家に持って帰って、すぐに気づいた。正確には、「変身」を読み始めて、昔の記憶を掘り起こしながら、僕はまるで最初から知っていたかのように、その考えに行きついた。僕はさっき、田所さんと話をして、本を売って、本を返されたのだと。あの頃夜な夜な夢想し、恋い焦がれた女性の顔を、忘れるはずがなかった。

「すごいね、勘なんかで、あんなに自信たっぷりに私に向かって田所さん、って呼びかけるんだもん」彼女はけらけらと笑う。笑い方まで昔と違う。もはや別人だ。でも僕にはわかる。彼女は田所さんだ。

「じゃあ、僕から、最後の質問、いいですか」

「なあに？」

あんみつは二人とも食べ終えていた。甘いにおいが僕たちの席に充満する。それは息苦しくな

るくらい、窮屈な匂いだった。空気が汚い。
「田所さんは、僕が本を売りに来たあの日、自分でこの本に落書きしたんですよね？」
「そういうことになるね」
「どうしてそんなことしたんですか。田所さんは、僕を見て、僕だって気付いたってことですよね？」
彼女は少し考える。「そうだね、あ、秀一くんだってすぐにわかったよ。だって、秀一くん、何にも変わってないんだもの」おかしそうに、くすくす、と笑う。「あの頃の小学四年生の男の子が、そのまま縦におっきくなっただけって感じ」
彼女の言葉を聞きながら、なんだか情緒不安定な、一緒にいて落ち着かない感じのする女の人だ、と思った。会話しているのに、会話している感じがしない。
「その本ね、私が彼に貸してたものなの」
「貸してた？」
「私のなのよ、その本」
僕はテーブルの上の「変身」に目を落とす。
「彼が、カフカ読んだことないって、読みたいって言ったから、貸したの。わくわくしながら。中学生みたいでしょ？」
「それで、売ってほしくなかったってことですか」
どちらにせよ、父はもういない。この本が売れなかったところで、父の所有物には戻らない。

「わからない」彼女は遠くを見る。僕の向こう側に広がる景色を見る。もしくは、僕の中で確かに呼吸を続けている父の遺伝子に向かって話しかける。「あのときはどうかしてた。夢中で本に書いてた。手をぶるぶる震わせながらね。秀一くんに『こんな落書きさっきは無かった』って言われたらどうするつもりだったんだろうね。わからないけど、でも、なんとなく、そうはならないって気もしたんだよ。ただそれだけ」

彼女は席を立つ。

「ここは払っておくから安心して。私はバイトに戻るね。休憩繰り上げて出てきちゃったから」

「最後に――本当に最後に一つだけ、聞いてもいいですか？」

僕は「変身」のカバーをめくって見せる。

「これ、なんて書いてあるんですか？」

田所さんは一瞬だけ、昔の彼女のような表情を作った。

「『私のもの』って書いたつもりだったんだけど」照れたように笑う。

「それは、この本が、ですか？」

彼女は答えない。

僕は一気に興味をなくして、母がいつパートから帰ってくるのかを考えている。

（教育学部中学校教員養成課程国語専攻四年）

第六回東光原文学賞優秀賞受賞作品

水面の蝶は空を見るか

有沢　紅夜

例えば、――そうたとえばの話、あなたに大切なひとがいたとする。どんな状況にあったっても傍にいて、そのひとがいかに傷つき苦しんでいたとしても決して逃げたりしないそんな相手。相手の苦しみは自分の苦しみ。相手の喜びは自分の喜び。そのひとのために生きたい、そのひとと共に生きていたいってつい夢想してしまう、愛しくて恋しいとっても大切なひと。……あなたにとっては。

だが、そのひとはあなたと同じようには愛してくれてはいない。友人としては見てくれたとしても、あなたを恋人のように思ってくれることは絶対にない。たとえ、あなたがどんなに大切な存在だとしても、友情もしくは家族愛。恋情としてあなたを対等に扱ってくれることは望めない。アダムとイヴとは正反対な位置づけ。

それでも、あなたにとってはそのひとが一番大切な存在なのである。

一方通行な関係。

しかし、そんなあなたを愛してくれる人が現れたとする。優しくて、誠実で穏やか。こんな人

と一緒にいれば幸せになれるであろう異性が、あなたを愛するという。
あなたはその人を嫌ってはいない。寧ろ好ましい。意味づけを除けば、好きだと思えるし、大切だとも言える。きっと、この人と付き合えば自分は幸せになれるだろうと感じてさえいる。
でも、あなたにとって一番大切なひとがいる。誰よりも愛しく、誰よりも恋しい相手が。けれど、そのひととあなたが結ばれる可能性はないという……どれだけあなたがそのひとを想おうと。
そして、あなたの一番ほどではないけれど、大切で好ましい人が、あなたを好きだと言ってくれている。その人と結ばれるならば、きっとあなたは幸せになれるだろう。傷つくことなく、夜に襲い掛かる孤独に怯えることなく、世間一般でいわれるところの幸福に恵まれることが出来るのだ。
でも、あなたにとっては――。
もし、このような状況に陥った場合、あなたは一体どのような選択をするだろうか。
結ばれることのない恋情を取るか、それとも……？

＊

私は、川が好きだった。出来るだけ上流の、精一杯澄んだ冷たい水を湛えた川が。
学校が休みの週末、私はよく近所を流れる清流で泳いでいた。こういう時に、自然のある田舎というものはありがたいと思う。水着の上からサイズの大きいTシャツを着込み、いつもは高く

結っている髪を空になびかせて川で泳いだ。穏やかな、足は届かぬほど深いのに、天気の良い日には底が透けて見えるほどの澄みきった川。

その中に我が身を滑り込ませる。

足先をつけただけで、全身に鳥肌が立つほど水は冷たい。ひょっとしたら自分の心音を奪ってしまうんじゃないかとつい考えてしまうくらいの水温に、徐々に身体を沈ませていく。ほぅ、と吐息が唇から漏れた。

やがてその水温に身体が同化してきたのを見計らって、私は川底へと潜っていった。上の方は少し流れが速いが、下に行くにつれだんだんと緩やかになるのを感じる。どこからか、かぷかぷと水が湧き出す音が聞こえた。

絶えず新しい水が流れ込み、淀むことのない水底に横たわる。水草がチロチロと肌を撫ぜた。少しくすぐったくて柔らかな感触。私は目を閉じて、くすりと笑った。コポリと口腔から小さな気泡が飛び出して上へと昇ってゆく。瞼の裏で、陽光がちらちらと爆ぜていた。

ここにいると、私は私であることを再確認する。世界と私との境界線を鮮明に感じ取ることの出来る感覚。身を切るほどの冷たい水と、それに対抗するかのように身体の芯を廻る温かい自分の血潮との温度差。そのくっきりとした境目に私がここにいることの証明を見出したような気がして、ホッとするのだ。

ゆっくりと目を開ける。息継ぎをしようと、水面にざぷりと顔を出した。

全身で息をするような、その感触。

さらさらと柔らかな水音を響かせて、清廉な水が頭を、肩を、とめどなく流れていく。

空高く、川に頭を垂らした木の葉の隙間から暖かい陽光が降り注いでくる。届く、かすかな土の匂い。朽ちていく落ち葉の香り。倒れた木々の影。風にざわめく枝のしなった音。目の端で、魚が身を翻して光ったのを捉える。

いのち、というものを信じずにはいられない。

もう一度、川底に潜り横たわった。あえて先ほどまでしていたゴーグルを外し、目を閉じる。瞼を掠める水流の存在を感じたかった。

――私は、川が好きだ。

絶え間なく流れ、ひたすらに海を目指す川が好き。停滞することなく、狂うことなく、進み続けるその様が好き。荒れた川も、凪いだ川も、大きささえも関係なく川そのものに惚れている。でも……とは思う。望むならば、出来るだけ上流の、岩がごつごつとした険しい川がいい。冷たく澄んだ水を湛えた川。清流というものがどうしようもなく大好きだ。

私が私でいるために、私は川に通う。

摂理に統一された静けさ。自然がたてるかすかな音に身をゆだね、私は水底で凪いでいた。

そこに。

唐突に、頭上から水面の割れる音が聞こえた。あまりに突然の事態に驚き、うっかりと肺の空気が水中へと逃げていく。苦しい。目を開いても、ゴーグルを外した瞳にはすべてがぼやけてで

しか見えない。灰色の人影らしき曇り。この空間を壊したのはこいつかとつい憤ったものの、実際のところ自分自身はそれどころではなかった。息が出来なくて、条件反射で涙腺から零れだした涙が、川に消える。

冷え切った身体が不意に感じたのは、やけどしそうなくらいの熱い手の感触だった。大きな掌が私の腕を掴んで物凄い勢いで上へと引き上げていく。

水面から出された私が真っ先にしたことは呼吸だった。貪るように酸素を求め、喘ぐ。目尻からは再び涙が滲み出ていた。咳き込むようにして上下する背筋を、熱い手の平がゆっくりとさすってくる。そして、

「お前、死にたいのか!?」

という怒声がすぐてっぺんから降り注いだ。太い、男の人の声。面を上げれば、心底焦ったような表情をした精悍な顔が見えた。日に焼け、黒ずんだ肌がよく似合っている。同い年くらいだろうか、ずいぶんと青い雰囲気だった。

彼は私の腰に手をまわし、水中に沈んでしまわないように支えてくれていた。だが、その気遣いを理解することなく、自分の胸中によぎったのはむしろ殺す気ですか？　という苛立ちである。彼の言動と、自分の現在の状況に対する認識との齟齬に、心を波立たせざるを得ない。

その間にも彼は、ひたすら怒りを表していた。

「何があったかは知らないが、馬鹿なこと考えるな！　親御さんが悲しむだろうが。自殺なんて

するもんじゃない！」

ようやく違和感の正体がわかった。ちろり、と近くの岩場に目を向ければ、自分の置いた靴が行儀よく揃って並んでいる。どうやら、彼は私が入水自殺を図っていたかのように見えたらしい。

「あのー……」

「なんだ？」

「私、自殺なんてしてませんけどー」

「……は？」

彼はきょとん、という顔をした。それに対して、更に誤解を解こうと言葉を重ね説明する。曰く、自分は単に川で泳いでいただけにすぎず、こうしているのが好きで毎週のように川に通っているのだ、と。

すると彼は、まじまじとこちらの顔を見つめ、深々とため息をついた。

「お前、傍から見たら相当悲惨な様子だったぞ」

彼の言うところによると、真っ青な顔をした若い女性が髪をなびかせ川底に沈んでおり、よく見ると岩の上に靴なんかも揃えて置いてあったらそりゃもう自殺にしか見えないとのことで。思わず確かに、と頷いてしまいそうになった。

「えと、ご心配かけてすみませんでし、た」

「いや、こっちも驚かせてすまん。危うく溺れかけるところだったろう」

彼は、気まずそうに頭をかいていた。どうにもいたたまれなくなったのか、ちろちろと視線を

泳がせている。
その様子を見ながら、どうでもいいがそろそろ離して貰えないものかな、と思った。もう落ち着いたし、自分で泳げるからもう沈まないし。抱きかかえてもらったままだと、あまりに距離が近くて心臓にも悪い。
「それで、そのー」
「ん？」
「泳げるので、放してもらってもいいですか？」
「え？　あぁっ！　わ、わるい」
腰に回ったままの腕を指して愛想交じりにそう言うと、面白いほどに慌てて離してくれた。思わずくすくすと笑えば、彼は真っ赤な顔をして「笑うなっ」と叫んでくる。
全然怖くなかった。

＊

「こないだねー、川で泳いでたら自殺志願者に間違われたんだー」
「当たり前だ馬鹿。誰でも思うわ、傍迷惑なやつめ」
「ひどっ！」
昼休みの図書室、ここで私とかれは声をひそめて話をする。周りの喧騒なんぞ意にかけること

なく存在するこの場所は、不思議なくらい静かで心地良かった。
広い図書室の中には、私とかれ以外には男子生徒がひとりしかいない。私は、かれが本を読んでいる隣でとりとめのないことをずっと話していた。かれは気の向いたときだけ返事を返す。それだけで、十分だった。隣にいるだけで満足。声も聴けるし、幸せ。本気でそうも思っている。へにょり、と顔を緩ませてまた話しかけて、話しかけて返事貰ってまた話しかけて……飽きずにそれを繰り返した。
「そういえばね、その人ね、私と同い年だったんだってー」
「……」
「それでねー、結構格好よかったのー。ふふ、妬く？」
「誰が妬くか阿呆。寝言は寝て言え」
「相変わらず暴言が炸裂しますねー。ちょっとくらい妬いてくれてもいいのにー」
唇を尖らせてすねる仕草を見せると、かれは心底面倒くさそうにため息を落として、手元の本を閉じた。そして、私に目を合わせる。これでもかというほどの冷たい視線に、内心背筋が凍った。もちろんそれを面に出さないように努力し、自制する。それでも、どことなく動きがぎこちなくなることは止められなかった。
「俺は、お前を好きになることはない。いい加減諦めたらどうだ？」
「……分かってるもん」
笑え、笑ってくれ自分。お願いだから飄々とした態度を取り繕って！

「ならいいけど。振り向かない人を追い続けてもいいことないぞ」
そう言ってかれは再び本の世界に舞い戻った。
君に言われたくない、とぼそりと呟くと完全にシカトされる。思わずこみ上げる涙の衝動を堪えた。こんなの今更、分かりきったことで、何度も言われ慣れてることじゃないか。そうだろう？
泣いてたまるか。

私はかれのことが好きだ。けれど、かれは私のことが好きではない。友達としては大事にされていると思う。でもそれは恋情じゃない。決して恋人にはなれないのだ。

かれが本を読んでいるのを見るのが好きだ。
細くて長い綺麗な指も、
時折メガネを押し上げる仕草も、
皮肉気に嗤うのも、
低くて艶めかしい声も、
実はコンプレックスで悩んでいることも、
飄々として見えるけど内心ビクビクしてるとこも、
自分に厳しいところも、
自分に絶望しているところも、

強がっているとすぐ見抜いて指摘してくれるところも、
道を外れそうになれば躊躇わず叱ってくれるところも、
本当は誰よりも情が深いところも、
かれのすべてが、愛おしくて仕方がなかった。
けれど、私がいくらかれを愛してもかれは私を愛してはくれない。あげたら同じだけ返してくれる対等な関係なんかじゃない。
それでも、私はかれを愛していた。
隣に、友達として存在できるだけで幸せだった。
満足はしていないけれど、本当は愛して欲しいけれど、それでも幸せなのは確かだった。
だけど、かれにとっては、振りつづけてもそれでも傍から離れようとしない私を突き放すためにする行為は、まさに良心を痛めるものだった。そこにつけこんで、かれにしがみついた。みっともなくても、愚かしくても、心は傍にいることを望んでいた。近くにいたかったのだ。私を見てくれなくても。
前の告白のとき、やっぱり私を振ったかれはこう言った。
『お前さ、他にも良い奴いるだろ。俺よりも優しくて、誠実で、穏やかで、お前を幸せにしてくれそうな奴。俺じゃなくて。何で、よりによって俺なんだ？』
そのとき、私が答えたのは何だっただろうか。とにかく必死だったから、よく覚えてはいない。けど、今ただ一つは確実に言える――そんなの、こっちが知りたい。

かれより優しくて、誠実で、穏やかで、カッコいい人くらいこの世界にはいくらでもいると思う。世界には六十七億人の人がいて、それなのに全く同じ人はいないんだから可能性はまさしく無限大のようにも考えられるし。世界は広い、なんて大人の常套句なのだから。

いつも暴言ばかりで皮肉たっぷりで嫌味なんか日常茶飯事、おまけに厳しいものだからかれには何度も泣かされている。ホント遠くから見たらこんなひとクソくらえだ。

でも、やっぱり好きなのだ。かれのことが。

どこまでの無限ループなんだろう。いくら考えたって戻ってくるのはこの一言。

好きになってしまったんだもの、仕方ないじゃない。

だから、開き直って私はかれにしがみつく。たとえ、どんなに人に愚かだと呆きれられようとも。

何度目かもう数えきれないほどのかれの拒絶に凹みながら、教室に足を向けた。図書室で借りてきた本が異様に重く感じる。ため息を落とし、とぼとぼと歩く。不意に、熱い手の平に肩をたたかれた。覚えのある感覚に慌てて振り返る。

「どうした、今にも川に飛び込みそうな顔してるぞ」

先日私を自殺志願者と間違えた件の彼が心配そうにこちらを見つめながら立っていた。

＊

チャイムが鳴る。本来ならば教室で授業を受けているはずなのに、私と彼は今ではほとんど使われることない校舎の階段のところにいた。人生初のサボり体験。常々してみたいなーという憧れ的なものはあったのだけれど、こんな形で叶うとは思いもしていなかったなと思う。

「ほら、これ」

「……ん、ありがとう」

ちょっと待ってて、と告げてどこかに消えた彼が戻ってきたとき、その手には二本の缶コーヒーが握られていた。近くの自動販売機で買ってきてくれたらしい。素直に受け取り、プルタブを開けて口をつけた。彼は黙って、私の隣に座っていてくれる。なんだか、心地良かった。

そのまま缶をちびりちびりと傾けていれば、ささくれ立っていた気分もだんだんと落ち着いてくる。少し顔色が良くなってきた私を見て、彼は安心したように小さく笑った。

「同じ学校だったんだねー」

「……お前、気付いていなかったのか」

同じ学校なんて思いもしなかったから、まさかこんなところで再会するなんて、って言ってみると、彼は信じられないかのように頭を抱えた。じろり、との恨みがましい視線。その睨んだ眼光にちょっとだけ怯む。

「言っとくが、毎日顔合わせてんだぞ」

「え、そうなの!?」

「掃除場所、一緒だろうが」
「えー……うそー」
今度は私が呆然とする番だった。目も悪く、人の顔を覚えるのが苦手だとはいえ、まさかの掃除仲間に気付かないとは。さすがに申し訳なくなる。
「ご、ごめんなさい……」
「や、別にいいんだけど」
こちらが決まり悪げに謝れば、彼はふわりと笑って許してくれる。……ほんとに好い人だ。
それからついついと放課後までいろんな話をした。好きな本や食べ物の好み、政治情勢に――私が川を好きな理由まで。彼は釣りが好きで、あの日川に来ていたことも知った。たくさんの話題がぽんぽんとテンポ良く弾んでいく。彼が聞き上手で話し上手だったのも勢いに拍車をかける結果になった。
久しぶりに時間が矢のように過ぎて行った感覚を味わったと思う。気がつけば部活動が終わるくらいの時間になっており、あたりがようようとほの暗くなってきて初めて二人とも我に返る有様だった。それほど心底夢中で話していたのだと思うと、ちょっと気恥ずかしい。空は茜色に染まり、後片付けを告げる部活動生の声が響いてきていた。
そろそろ帰ろうか、とお互いに腰をあげる。長時間同じ姿勢で座っていたからか、何やら強張りがひどい。思わず相手を窺うようにして顔を見合わせ、二人で笑った。妙に晴れ晴れしい気分に包まれる。こんなに長く喋ったのはいつ以来だろうか！

「お前、泳ぎに行って溺れるんじゃないぞ」
「君こそ、釣りに行って私を釣り上げないでね」
他愛もないふざけ合った悪態をつきながら、くすくすと笑みを漏らす。一生を基準とするならばほんの刹那くらいの会話だったけれど、結構親しくなるには上等なくらいの時間だった。昼休みに落ち込んでいたのがまるで嘘みたいな、胸躍る体験。
鞄を取りに、もう誰もいないであろう教室へと戻る。その道中でさえ、会話が途切れることはない。ふらりと投げればまた確実に返される。そのやり取りが言葉遊びのようでひどく楽しい。私も彼も常に笑っていた。
それを境に、私たちは喋る機会がどんどん増えていった。もともと接触する場があったのに加え、両者ともに妙に趣味や思考回路、笑いのツボが似ていたのだ。一緒にいると居心地がいい。
いつしか彼は、私の大切な人へと変化していった。

＊

次の週末、私はまた川へと足を運んでいた。泳ぐためにいつもの場所へと身体を馴染ませていく。今日はいつものTシャツではなく、白いワンピースを羽織って泳いでみた。着衣水泳ともいえども、慣れている身にとっては、ふわふわと揺れる布の感触がとても気持ちいい。そのまま瞼を閉じて、きらめくいのちを体感する。

やっぱり川が好きなのだと、私が私であることを再確認する。いつもの、必要不可欠な作業工程。

息継ぎに水面から顔を出せば、そこには彼が存在していた。少し驚いた私に彼は笑いかける。

「やっぱりここにいたのか」と言いながら、肩に背負った釣り道具を降ろしていた。

「ちょ、私を釣らないでよ？」

「お前がエサに喰いつくほど腹減らしてないなら大丈夫だろ」

そこまで食い意地張ってない、といじけるように傍に泳いで行けば、宥めるように頭を撫ぜられた。それに納得いかなくて、なんだか子ども扱いされてる気がする、と更に膨れてみる。今度はあっさりとスルーされたが。

彼は彼で釣りを楽しむようであったし、私は私でまた泳ぐことにした。気が済むまで、思いっきり。そうして、ようやく落ち着いたのは日が暮れる直前だった。

ざばり、と陸に上がってきた私を見て、彼は呆れたように言う。

「よくも風邪をひかないもんだな。寒くないのか」

「んー、寒いといえば寒いけど、心地いい寒さだよー」

とたんに理解不能って顔をした彼を意に介さず、持ってきたタオルで身体を拭こうとバックをあさる。お、発見。すると、彼がひょいと手からタオルを奪い、こちらの水気を拭いだした。わしわしとペットじゃあるまいし、という抵抗は余裕で総スカンだ。なんてこと。

「よし、まだマシかな。見てるこっちが寒いぞ、さっきのは」

「むー……」
複雑そうに唇を突き出す私に彼は爆笑する。そして、おもむろに真顔へとその表情を変化させた。突然の変わりように思わず首を傾げる。
「なぁ」
「何？　どうしたの？」
問いかける私の目を見て彼は、
「俺、お前のこと好きだ」
と、告げた。
とっさに自分の聴覚を疑い、次に彼の頭の中を疑う。私を、好き？　誰が？　……彼が？　罰ゲームなのだろうかとぼんやり思った。ちょっとしたドッキリサプライズという可能性もある。
「俺と、付き合ってくれ」
どうやら、信じられないことに彼は本気らしい。目の前にある頬の赤らみに、私はようやく理解せざるを得なかった。血液がとんだ勢いで上へ上へとのぼっていくのを感じる。絶対今顔真っ赤だ、うん免疫ないし。
だが、それよりも。
「どう、して私なの……？」
正直、客観的に見ても私はあまり可愛い方ではないと思う。特別痩せているわけでもないし、何を言わそう最愛のかれに振られた理由が「俺、面食いだし痩せてる人がタイプだから」だった

のだ。こんなあんまりなセリフで好きな人に振られたら自信なんて持てるハズがない。だからこそ、私は彼の告白を疑うしかなかったのだ。

「お前と話している時が一番楽しいし、笑った顔も、怒った顔も、ふざけてるときも、思考回路も、全部好きだ。俺と、付き合って欲しい」

思わず、言葉が喉をつかえる。私だって彼のことは好きだ。一緒にいたら楽しいし、誠実で、温かくて、私のことを理解してくれている。きっとこんな人と付き合えたら幸せなんだろうな、なんてつい夢見たこともある。ただ、あくまで想像上の話だったのだ。ありえない！　なんて笑えてしまえるからこそのＩＦ話。――なのに、彼は私のことを好きだという。現実として、こんな私のことを愛してくれるというのだ。

真剣な顔をして、私の返事を待っている彼。

そして、私は答えた。

＊

放課後の図書室に、私とかれはいた。私たち二人以外は誰もいなくて、ただ窓ガラスから夕焼けの光が差し込んでいる。あいかわらずかれは本を読んでいて、私は隣に座っているだけだった。ただいつもと違うのは、ここまで自分が一回も口を開いていないということだ。かれはそのことを気にしてくれているのかいないのか、本から目を離す様子もない。けど、それでも良かった。

「私ねー、例の彼に告白されたんだー」
何気ない調子を装って告げる。ピクリ、とかれの肩が一瞬動いた気がした。……けど変わらない。
「ほら、このまえ言った私を自殺志願者と間違えた人。同じ学校でねー、なんと同じ掃除場所だったんだよ！　すごくない？」
かれは無言だ。ただ無言でページだけをめくっている。ツッコミくらいあると思ったのに……最早それさえも許されないのか、なんて。思わず悲しくなって、でもそれを悟られないように口調を心なしか早くする。
「けっこう話とか合って、いい人なんだよー。穏やかで、優しくて――ほんと、なんで私を好きだっていうのかわからないくらい」
言葉が途切れた。再び沈黙が戻ってくる。もう何を言えばいいのかわかんないな。先ほどの自分の発言を思い返す。声は震えてなかっただろうか、声色はどうだっただろう？　いつも通り出来ていただろうか？　そう振り返るのに一生懸命で、いつのまにかペラリという音が聞こえなくなったのに気付かなかった。
パタンという音が虚空を蹴って、我に返った私の眼前にはかれの視線が在った。何となく、泣きたいような気分になる。かれの、ここぞという話のときにはきちんと目を合わすその行動を自分はとても気に入っていたのだ。
「よかったじゃん」

かれは言った。
「そいつと付き合うのだろう？　優しくて、誠実で、穏やかな理想の相手が見つかったんだから言うことはないな。せいぜい幸せになってくれ」
相変わらず容赦ないなーすでにこっちは泣き笑いだ。
「むぅ……あっさりしすぎじゃない？　もうちょっと別の反応があったっていいのにー。好い女逃したなんて後で後悔しても知らないよー」
茶化すように言う。気力振り絞ってだ。なのに、そんな私を打ち崩すようにかれは視線に冷やかさを乗せて返してくるのだから、ホントに鬼だ。
「馬鹿かお前は。せっかくの高物件がお前のことを必要としてくれているんだから四の五を言わずにさっさとくっつけ。俺は過去の選択を後悔するほどボンヤリとは生きてはいない。どう見たってお前が幸せになれるのはこっちだろう。――まだ、戯言をほざくつもりか？」
「……それでも好きなんだよ、君が」
何度目かもわからない告白。力なく笑みを浮かべて告げた言葉は、やっぱり彼の歪んだ表情に叩き落された。深い深いかれのため息。それに対して、私は曖昧な笑みを浮かべることしかできなかった。それを崩せば、耐えていた決壊が今度こそ決定的になるのを止めようがなかったから。
「……お前の好きな川で例えてやろう」
「え？」
驚くしかなかった。新しいパターン。いつもは適当な言葉で切られ、封じられるだけだったの

に。前例がないからこそ戦々恐々とする私を尻目に、かれはたんたんと語っていく。
「例えるならば俺は水底だ。深い、水の底。そして、お前は蝶だ。二つの接触ポイントは水面しかない。それ以上深く潜ることは蝶にはできないし、潜ることそれ自体が死を意味する。水が透き通って水底が見えたとしても、お前にはそれに触れることは適わないんだ、絶対に。だから焦がれても水面までという不毛な関係にしかならない」
　口をギュッと引き結ぶ。反論することも出来た。だけど、それがただの屁理屈になるであろうこともわかっている。今は大人しく拝聴する他なかった。
「不毛な行為に必要もなく身を殉じる奴はただの馬鹿だ。たとえ本人は良くても、周りは？　全うに幸せになれる道があるのにそれを選ばず、わざと苦心の道をゆくのは自己陶酔の神髄だろう。蝶だってわざわざ届かぬ水底に恋うよりは、上をみて空に舞い上がる方がどう考えたって正解だ。受け入れてくれる奴のところに、あるべき場所に収まるべきだ」
　言いたいことがある。胸に渦巻く衝動をかれに向かって吐き出してやりたいのに、それを表すことばがない。もどかしさにくらくらする。
「俺はお前のことを恋情で見てやることは絶対にない。諦めろ、別の道に出会え。お前がそれを見つけて笑えるようになったとき、ようやく俺もお前と友人としての関係を構築できる。俺もお前も、対等に幸せな関係を築けるだろうよ」
　そうして、かれは席を立った。優しかった。今までとちがった優しさに、とうとう最後通牒を突き付けられた気がするのだ。欲しかった、優しさが。だが――。

＊

また、川に行った。のろのろと着替え、川へと滑り込む。あの、安息の地に早く戻りたかった。足を水に潜らせ水底に横たわる。これはかれだという。今、私は届いているのに！　と喚きたくなる気分だった。本当に、うまくいかないなあとぼやく。口のパクパクさせる分だけ気泡がこぽこぽと昇っていった。その歩みの迷いのなさが羨ましくなって、自身も水面へと上がっていく。そのままプカリと大の字になって水上に浮いた。木漏れ日が遮るものなく顔面に降り注いでくる。

空の青に、彼を想った。結局、彼の告白にきちんと応えることはしなかった。好きな人がいるのだと説明して、中途半端になるから、と。自分でも少しもったいない気がしたのだけれど。でも、彼はすごかった。

好きな人がいると説明した後、彼はこう言ったのだ。

「じゃあ、我慢比べだな。そいつがおちるか、お前が俺におちるか。俺は諦めねぇから。釣りってのは精神勝負だからな、お前が餌に食いつくまで、じっと待っててやるよ」

その様子を思い出して、クスリと笑う。実際セリフを聞けば青臭いところもあるのだけれど、そこもまた好ましい。かれもそんな言動が出来ればいいのに――と想像して、それがまた有り得なすぎて笑う。

川は、何も変わらなかった。

（教育学部地域共生社会課程三年）

第六回東光原文学賞優秀賞受賞作品

さよなら、ランガー

植草 しおん

小佐井渡りという祭を、あなたはご存知だろうか。
私は、ついさっきまで知らなかった。

＊＊＊

先週末から日本上空に強烈な寒波が迷い込んでいる。あまりの急な寒さの到来に驚いた私は、昨日洋服ケースの奥から冬物の薄いコートを引っ張りだした。
いつもの冬の私は、極力外出を避け、亀のようにできるだけ閉じこもることにしている。今日だって、何もなければ一日中部屋に引きこもってレポートの一つでも書こうかと思っていたのに、とある一本の電話でここまで引っ張りだされてしまっていた。
私はそのコートに身を包み、ストールを首に巻いて、サークル棟の正面に立った。
サークル棟は正式名称を学生文化会館といい、中には文化系サークルの部室が入っている。私

の所属する落語研究会も部室をこの中に構えているが、今日の私に用があるのはその部室ではない。

サークル棟のドアを開け、すぐ右手にある階段を二階まで登る。登りきると廊下が正面と左に伸びていて、左の廊下はすぐ道なりに右に曲がる。二本並行した各廊下の両サイドに部室が入っている構造だ。ちなみに我が落語研究会の部室は、正面の廊下の突き当りから三つ目の右側である。

普段は用のない左側の廊下に進む。学園祭が近いからか、各部室に収納しきれなくなったいろいろな道具が廊下に溢れだし、空間を侵食占拠している。歩くことのできるスペースは、本来の廊下の中央三分の一ほどしかない。この廊下には構造の関係上窓がなく、暗い。昼でも頼りない蛍光灯だけが頼りとなる。陽射しがないので底冷えした。

物に躓かないように気をつけて廊下を進みながら、今朝のことを反芻する。

今朝、私は携帯電話の着信音に叩き起こされた。

私は今日いちにち部屋で寒さをやり過ごすつもりだったから、温かい布団から離れた冷蔵庫の上で携帯電話が鳴り始めたことにまず苛立ちを覚えた。人がせっかく惰眠を貪っていたというのに。それから、冷蔵庫の上に電話をおいた昨日の自分をも恨んだ。電話は鳴り続ける。仕方なく、のそのそと布団から這い出した。

電話のナンバーディスプレイに出ていたのは、私の知らない番号だった。そんな電話には私は

出ない。通話終了のボタンを押して電話を切り、元の場所に置いてまた布団に潜り込んだ。これが失敗だった。

二度寝をきめようと眼を閉じた瞬間、再び着信音が鳴り始めた。私は後悔した。なんで電話を枕元まで持ってこなかったのか。無視を決め込もうとしたが、着信音はまたも切れる気配がない。

出ればいいんでしょ、出れば。

よく覚えていないが、ディスプレイされた番号はさっきのものと多分同じ。普段の私なら断固として知らない番号には出ないのだが、人の惰眠をずかずかと踏み荒らす無遠慮さにカチンと来ていた私は、掛けてきた奴にキツい一言でも見舞ってやろうという気分になっていた。迂闊な話である。

電話の主は『小佐井渡り実行委員会』を名乗る男だった。聞き覚えのない声、身に覚えのない名称の団体だったので、最初は掛け間違いを疑った。しかし相手は私の名前を知っており、「故あってこの番号にかけた」のだと言う。その上で私に「ぜひ受け取りに来てもらいたいものがある」と宣った。

無遠慮な電話への苛立ち、そしてこんな電話をかけてくる奴は一体どんな奴なのだろう、ひと目その顔を拝んでやろうじゃないかという好奇心が、私に「わかりました」と言わせた。

電話を切った後、身支度をしながら、そういえば電話の主は「ぜひ受け取りに来てもらいたいものがある」といっていたが、一体それが何であるかを聞きそびれたことに思い至った。大体、『小佐井渡り実行委員会』というのもどういう団体なのかわからない。小佐井というのは私の住

むアパートのすぐ近くの橋の名前だが、それと何か関係があるのだろうか。実行委員会というくらいなのだから、おそらく何かの催し物、もしくは祭の類なのだろうと推測はできる。しかし、祭であれば、ここに住んで三年目の私が耳にしたことすらないというのは変だ。いや、実際に存在するものの、祭の規模が小さくて、私のアンテナに引っかからなかっただけなのかもしれない。だが例えそうであったとしても、直々に私への名指しの電話がかかってくるだろうか。そして、渡したいものとは？

部屋を出てから、己の迂闊さを恨んだ。寒い。強烈に寒い。薄手のコートでは体温維持が間に合わないかもしれない。やっぱり断ればよかったなとも思ったが、今さらもやもやを抱えたままこの件をうっちゃるのも精神衛生に良くない。結局、首元に忍び込む寒さに身をすくめつつ、学校への歩を進めたのだった。

よく考えれば、ここに来ていること自体がもう既におかしい。

机や椅子や棚やアンプセットなどが所狭しと並ぶ廊下を進みながら、私は潜考した。

ここに呼び出されたということは、小佐井渡りとやらの実行委員がここにいるということだ。私は小佐井渡りとやらが小佐井橋の周辺住民による地域の催し物だと思ったのだが、大学内にその組織があるとなると、これはおそらく大学の祭となる。大学で行われる祭、しかも実行委員会が組織されるような祭には、大抵文化系・体育系を問わず、各サークルに準備や運営のための動員が掛かるはずだ。だが私は、我が落語研究会にその動員が掛かったという話を聞いていない。

つまり、小佐井渡りという祭の存在は極めて疑わしい。この『小佐井渡り実行委員会』とやらにしても、とてつもなく胡散臭い集団であるということだ。

本当にそんな実行委員会が存在するのか？

そしてなぜ電話の男は私のことを知っていたのか？

だんだん自分が迂闊にもなにか良くないものに巻き込まれていっているのではないかと不安になってきた。

先ほどの電話の指示に従い、廊下の一番端まで進むと、非常ドアに突き当たった。ドアを開けると外が眩しい。光に慣らすようにそっと目蓋を開くと、目の前にポールが一本立っていた。なるほど、非常時にはこれを滑り降りるらしい。振り返ると、ドアの右側にステープラーの針の親玉のようなコの字の梯子段が上に続いている。指示によれば、これを登るのだそうだ。スカートにしなくて正解だった。

なんとか登りきると、屋上に出た。陽射しをようやく浴びることができたものの、吹きさらしなので余計に寒い。

今登ってきた梯子段のちょうど対角線あたりに、ドアしかない小さな建屋がある。指示された目的地はあそこだ。

身を縮こませながらドアまで辿り着く。ドアノブはキシキシと音を立てて引っかかりながら回った。

「失礼しまーす……」
そっと中を覗くと、コの字に組まれたソファの向かい合わせに座る二つの人影が見えた。中は薄暗く、明所に慣れた目では顔までは判別できない。
「中澤さんかな？」
人影の一人が私を見つけたらしく、声をかけた。おそらくあの電話の声の主だと思われる。
「そうです。あの、さっき電話があって、私呼び出されたんですけど、ここで合ってますか？」
「そう、ここで合ってる。さ、中にはいって」
正体不明な不気味さを伴った電話口での対応と違って、なんだか人当たりが軽い。柔らかいのとはまた違っていて、軽いとしか表現しようがない。
招き入れられるままにその薄暗い室中に入っていく。
「さ、座って座って」
促されるままにコの字のソファのお誕生日席に座る。
目が徐々に慣れてきたところで、私は気づいた。
「え、なんで蒼佑がいるの？」
先ほど私と対応した男ではない、もうひとつの人影は、私のよく知っている男、桐谷蒼佑のものだった。
蒼佑は視線だけをこちらに向けて、押し黙ったままだ。
「中澤さん、こんな寒い日にわざわざご足労いただいてありがとう。君の電話番号は彼から聞き

ました」

『小佐井渡り実行委員会』の男が、一つ大きくあくびをした。

「僕は西里といいます。第三十八代の小佐井渡り実行委員長です。といっても、今はもう実行委員は僕しかいないけどね」

「は、はあ」

生返事をする私の頭の上には、きっとハテナマークが沢山飛んでいただろう。

「色々と質問したそうな表情だね」西里は私の顔を見て、ニッと笑った。

そりゃそうだ。私は朝から溜まった疑問をぶつけることにする。

「あの、そもそも、その小佐井渡りって何ですか？」

西里の説明によれば、こうだ。

遥か東の山系をその源流とし、この街の中心部を貫き海に流れ出る一級河川、日ノ川。この街は、東西に流れる日ノ川によって南北に分断されている。はるか昔からこの南北の往来に、この街の人々は心を砕いてきた。江戸時代には各所に渡船場が設けられていたというが、現代ではその代わりとして交通の要所に橋がかけられている。

この街の中に掛けられている十数基の橋の中で最も古いのが、この大学の最寄りの橋でもある小佐井橋だ。

昭和三十二年に竣工した二代目小佐井橋は、右岸半分をランガー橋構造、左岸半分を桁橋構造

で作られたハイブリッドな橋である。ランガー橋とはアーチ橋の一種で、橋の絵を描けといわれた時に描くような形を想像すれば大体合っている。

この橋を特殊な形で渡る祭が、『小佐井渡り』である。

小佐井渡りの歴史は古い。

学生運動華やかなりし頃、一人の学生が自殺した。この国、世界、そして自らの未来を憂いてその命を絶とうと決断した時、彼は内に秘めたその主張を誰かに伝えておきたいと考えた。そこで彼は、衆人環視の中でその思いの丈を演説したのちに華々しく散る方法を考案する。

彼は決行当日、私物を整理し、後に発見される遺書と檄文を机に残し、大学近くの下宿を出た。通勤通学で交通の混みあう小佐井橋に向かった彼は、おもむろにランガー構造に登りはじめた。頂上まで登りきる頃には、橋の歩道には騒ぎを聞きつけた野次馬の人だかりができ、警察も出動してくる事態となった。彼は集まった人々に自らの思いの丈を語ったが、川面を吹き抜ける風に絡め取られた彼の声は野次馬の喧噪に掻き消され、人々の耳に届くことはなかった。それでも彼は自分の主張が表現できたことに満足し、そのままランガーの頂上から川面に向かって飛び降りた。

彼の死は様々な波紋をよんだ。

死後に見つかった彼の遺書と檄文により、風に消えた彼の主張の内容が判明した。地元紙は大学当局の誤った対応によりこの事態が引き起こされたのだとさんざんに叩いた。以後、大学当局は学生の危険行為に対して厳格な罰則を適用するようになる。

警察や橋を管理する市の土木管理課などの行政当局にも、その安全管理のありかたに非難が集まった。市当局はこの事態は予想できなかったとの見解を示したのち、市内のアーチ部構造を持つ橋梁全てに対し、アーチ構造に簡単には登れないように安全柵を設置した。しかし、この安全柵は無意味なものだったことが後に判明する。

彼の死に対し、学生たちの反応は様々だった。ある者はその死を主義に殉じた神聖なものだと崇め、ある者は敗北主義者の犬死にだと誹り、ある者は数日後にはその事件の存在すらも彼方の記憶となっていた。彼の死は概ね、悲しむべきものではあるが、殉じるほどの主張を有していたわけではなかった、という評価に落ち着いた。そして、彼の死を神聖なものと崇めていた一派は、非難にさらされて対応に苦慮していた大学側の学生運動家排除の波に飲まれ、大学を追われていった。

数年後、彼の入水は枝葉末節が忘れ去られ、ランガー構造への登頂のみが伝説と化していた。そしていくつかの運動部が、その伝説を危険な形で復活させてしまった。

彼らは激しい飲み会を行った後に「度胸試し」として小佐井橋の安全柵を乗り越えランガー構造を渡るという危険行為をはじめた。これが小佐井渡りの原型である。あくまでも度胸だめしであるため、そのゴールは頂上からの入水ではなく、ランガー構造を渡りきることであるとされた。しかし、不運な幾人かは、自身の酔いと橋梁の揺れと川面を吹き抜ける風に翻弄され、ランガー構造を渡りきるという目標を達成できぬまま、不幸な結末を辿った。

不幸な学生の冷たくなった体は、どういうわけか翌朝に学内の高層建造物のそばで見つかるこ

とが多かった。大学当局は高層建造物から飛び降りる学生が続発する理由を掴みかねていたが、学生たちの間ではその顛末が噂となっていた。曰く、もしこの死が部内飲み会における度胸試しによって引き起こされたと露見すれば、危険行為に対する締め付けを厳しくしている大学当局に目をつけられ、当該運動部は間違いなく廃部処分となるだろう。いや、廃部で済めばいいが、関係した人間もすべて放校などの処分が科されると見て間違いない。それならば、故人には申し訳無いが、その不幸な学生が『何らかの個人的な理由で』『学内で』『単独で』飛び降り自殺を図ったことにする方がマシだ。そういうわけで、不幸な学生が出ると、その遺体を皆で学内まで運ぶのだ、と。

実行委員会の編纂した小佐井渡り前史によれば、そうした不幸な学生はわかっているだけで六名。他に、度胸試しに関与したことは間違いないものの、未だに行方がわからないままとなっている学生が二名。

あまりの犠牲者の続出ぶりに、さすがの各運動部も自主的な規制を模索しはじめた。

そして有志を募って結成されたのが、初代の『小佐井渡り実行委員会』である。当然ながら大学当局にその存在を知られてはいけないので、結成から今日まで秘密結社であり続けている。

実行委員会が結成されたことに伴い、小佐井渡りにはいくつかの明確なルールが設けられた。

一つ、実行者は事前に実行委員会に届け出て、飲酒していないなどのチェックを受けること

一つ、実行期日は実行委員会が決め、無断無許可で実施しないこと

一つ、実行委員会は実行者の安全をはかるため、最大限の注意を払うこと

一つ、実行ルールを守らねば、実行者および関係者に関する知りうる限りの情報を大学当局に匿名で通報すること

……

これらのルールにより、小佐井渡りは実行までのプロセスが大変煩雑になった。これを嫌い、それまで行われていた度胸試しとしての風習はほぼ壊滅したと言われている。

しかしこれによって、小佐井渡りに別の意味を見出す人間が現われるようになった。

大願成就。

小佐井渡りを成し遂げれば、どんな願い事がひとつ叶えられる。

各運動部の大会前になると、鍛えた体力と練り上げた精神力を試す場として、そして勝利を祈願する場として、この小佐井渡りを申請する者が出てくるようになったのだという。

そして……

「そんなプロセスを全く知らずに、小佐井渡りにチャレンジしちゃおうとする無謀な奴も、これまた年に数人現れる」

これまで一気にまくし立ててきた西里が、天井を仰ぎ見て、一つため息を吐いた。

「桐谷蒼佑くんが、今年の一人目だ」

＊＊＊

『小佐井渡り実行委員長』西里がどうしても私に受け取ってもらいたがっていたもの、それは今、私の隣を歩いている。

大学の通用門から細い裏路地を抜け、五叉路交差点まで歩いてきた。この交差点の歩行者天国を渡れば、目の前が件の小佐井橋である。

「……なんで？」

「……」

二人でとぼとぼと歩く道すがら、何度か蒼佑自身に事の顛末の説明を求めているのだが、彼は未だに何も言葉を発しない。身元引受人としては、何がしかの反省の弁なり、寒い日に私を引っ張りだしたことに対する謝罪なり、何か一言でもあるべきではないかと思うのだけれど。まあいいや。こいつが何か喋りたくなるまで、のんびり散歩でもするか。

午後三時。肌寒さも少しだけ和らいできて、まったりとした晩秋の空気が街を包んでいる。

歩行者天国を渡り、小佐井橋にさしかかる。

西里の話では、橋の構造とは力の押し合い圧し合いのバランスを取るためのものらしい。そのバランスの計算上、小佐井橋の向こう半分、つまり桁橋構造にはどうしても橋脚が数多く必要になる一方、こっち半分であるランガー構造では、そのアーチ間に橋脚は不要になるのだとか。先代の小佐井橋が川の増水の時に流木で天然ダムを作り、近隣の住宅街に水害をもたらした反省を踏まえてこういう構造になったというのだが、その効果の程は私にはよく分からない。

ただし、私にもこのランガー構造の部分に橋脚がないことはよく分かる。なにせ、車が通る度

に激しく揺れるのだ。特にランガー構造の中央部、つまり件の男が入水自殺をしたというアーチの頂上部分の真下に当たる付近は、トラックで通ろうものなら地震と紛うばかりである。

「ここ」

全部で九本あるランガー構造を支える柱の二本目のところで、蒼佑が立ち止まった。久しぶりに声を聞いた気がする。

「ここが、どうしたの？」

「ここの梁の曲がり角に、電話番号が書いてあったんだ」

柱の上部、梁と梁が折れ曲がって接合されているあたりを指差す蒼佑。

「『小佐井橋を渡る時はまずこの番号にご連絡下さい　小佐井渡り達成認定を致しますので』って書いてあって、電話したら西里さんが来た。それであそこに連れてかれた」

なるほど。あそこに連れて行かれた経緯はよくわかった。だけど、そうじゃないんだ。

「私が訊きたいのは、なんでそんな危ないことをしようと思ったのか、なんだけど」

「……」

また黙りこくる。

「どうせ、この間のコンクールでうまくいかなかったからでしょ」

私の言葉に一瞬だけ視線を宙に舞わせた蒼佑は、体を川面の方に向け、歩道の手すりに両肘を乗せた。

蒼佑は私と同じく、落語研究会の部員だ。
部員と言いつつ三味線とお茶子でお茶を濁している私とは違い、蒼佑は高座に上がって落語を演じる。それも、彼はうちの落研のエースだ。
先月、彼を含めたうちの部員三人が、学生落語の全国大会に出場した。私も付き添いとしてそのツアーについていき、観客として予選と決勝を見たけれど、身内贔屓を差し引いても、私には蒼佑の落語が決勝進出者のものより素晴らしく見えた。でも、結果は予選敗退だった。
決勝の舞台に進んだのは、プロの落語を丸々コピーして演じるタイプの演者たちだった。たしかに上手い。みんなネタはきっちりと細部まで詰めているし、プロっぽい客のくすぐり方を使ってくる。
たしかに上手いのだが、彼らの落語は私には突き刺さらなかった。なんというか、つまらないのだ。
私は同期入部の蒼佑をはじめとする部員たちの落語を三年間舞台袖から見てきたが、彼らは常に、舞台上で企んでいた。企んでいた、というのは、常に新しい狙いや意図を含ませて噺の解釈の練り直しを行っていた、ということだ。それは決して古典の形を崩すような横文字言葉を放り込んでギャップで笑いを取りに行くといった姑息なやり方ではない。登場人物の性格設定を正反対にしてみたり、ある話の登場人物を丸々一人増やしてみたり。そういった、もはや改作に近いレベルの解釈の練り直しである。
私達はド田舎の大学の落研で、生の落語を見る機会は殆ど無い。プロどころか社会人落語をや

るＯＢすらいない。そもそもこの地域には落語を観る、演じるといった文化すらないのだ。私達の手元にあるのは、ラジオやテレビでごくたまに流れる全国放送の演芸番組の録音のみ。

そんな状況だからこそ、うちの落研の部員はみんな企んだ。

我々は素人だ。テクニックがないのだから、プロの演じる通りにやって、プロのように受けるはずがない。プロのように泣かせる人情噺ができるわけもなく、プロのように古典のままの落とし噺で最初から最後まで爆笑の渦に巻き込めるわけもない。お手本があるわけでもなく、指導してくれる人間もいない。ないない尽くしだ。だから、自分達の感性を信じて、ネタのブラッシュアップを図らねばならないのだ。そう信じてきた。

だが、現実は違った。いや、あの大会の審査員だけが違ったのかもしれないが、とにかく蒼佑達の挑戦は受け入れられなかった。

大会後、蒼佑は予選ブロックの審査員に、講評を聞きに行った。その席で、審査員は「よく出来てはいたが、従来の噺の解釈と違うので点数を引いた」と言ったという。そのブロックで決勝に勝ち上がった演者は、江戸落語の大名跡のＣＤ丸写しの火焔太鼓をやって高い評価をうけたらしい。私は決勝の舞台でその火焔太鼓を見ていて、あまりのつまらなさに途中で意識が途切れた。

この大会は、学生落語の大会だ。たしか、そうだったはずだ。

ただの落語大会とは何が違うのか。出場資格が限定されているだけなのか。

私はそうは思わない。多分、うちの落研のメンバーは、誰もそう思わないのではないかとおもう。

学生落語、素人落語は、まず演者が楽しまなくてはならない。テクニックではプロに叶うわけがないのだから、戦うとしたら徹底的に己の楽しさを観客にぶつけるしかないのだ。ＣＤ丸写しの落語のどこに己の楽しさが詰まっていると言うのだろう。そんな落語をして、何が楽しいのだろう。

「あれ以来、何が正しいのかよく分からなくて。考えがまったくうまくまとまらない」

蒼佑の視線は川面をたゆたっていた。相当重症のようだ。

蒼佑は大会の後、部室にめっきり姿を現さなくなった。来月には新しいネタを客前に出す「ネタ卸しの会」があるというのに。

そして時を同じくして、美澪とも別れたと聞いた。

瀬戸美澪も、私や蒼佑と同期入部の落語研究会のメンバーだ。美澪は女子部員には珍しく、自身でも高座に上がる。いわゆる前座ネタと云われる小さなネタしか掛けないが、本人のひととなりが現れるほんわかした雰囲気の話芸で、敬老会の余興などでは必ずお爺ちゃんたちの人気をかっさらっていく娘だ。

蒼佑と美澪は去年から付き合い始めた。付き合い始めたという話を聞いて、なるほど、と思った。蒼佑には美澪がお似合いだ。破滅的な傾向のある蒼佑には、美澪のように柔らかく受け止められる人間が確かに必要だと思った。

ある時、こんな話になった。

江戸落語のある家元の言葉に「落語とは人間の業の肯定だ」というものがあるが、これはどういう意味なのか。私と蒼佑、美澪、その他数人の部員たちは、ああでもないこうでもないと色んな意見を出していた。

「俺は、不幸になってほしい」

蒼佑が言った。例えば好きな人に振られた時、相手にどんな感情を抱くか、という話になった時だった。

「俺を選ばない奴には、幸せになってほしくない」

そう言い切る蒼佑に、周りは押し黙った。

「私は逆だけどな」

私も口を開いた。

「私を選ばなかった人が、もっといいはずだと選んだ選択肢が不幸だったら、選ばれなかった私がすごく可哀想じゃない？」

「それは単にそいつの見る目がないだけだろ」

「そうかもしれないけどさ、好きな人、あ、振られてるから、もう好き〝だった〟人か、そんな人が不幸になるのを見るよりは、幸せになってるのを見たほうが、まだ自分自身を納得させられるんじゃないかと思う」

「俺は、俺を選ぶことが正解の選択肢だとしか思えない。自分が幸せになれない選択肢は、相手

が幸せになったとしても俺の正解の選択肢にはならないよ」
「そうかなぁ。相手の幸せを願うのって、そんなに変かなぁ」
私は何の気なしに美澪に視線を送った。それまで話を聞くばかりだった美澪は、にっこりと微笑んだ。
「その人が幸せになるか不幸になるかは、未来にならないとわからないよ。幸せになれぇ～って願っても、不幸になれぇ～って願っても、本当にそうなるかどうか、時間が経たないとわかんない。振られた相手にそんな時間を掛けるくらいなら、そんな人忘れて新しい恋でも探したほうがいいんじゃない？　その方がきっと幸せになれるよ」
たしかにそうだな、と思った。柳のような強さを、美澪は持っている。

「蒼佑、あんたほんとに美澪と別れたの？」
「……振られたよ。今の俺は見てらんないんだとさ」蒼佑は視線を川面から離さない。
意外だった。私はてっきり蒼佑から別れ話を切り出したのだと思っていた。
「そっか」
私も川面に視線を送った。川釣りをしているおじさんが、何かを釣り上げていた。陽の光が川の流れに合わせて煌めいている。
「じゃあ、今日は飲もっか」
私は蒼佑の肩を叩いた。

＊＊＊

小佐井渡りのルールはとても煩雑だ。ゆえに実行委員のやるべきことは多い。

まず、実行日の選定が行われる。基本的に交通量の少ない深夜に行われることになっているが、周囲に工事などの交通規制があった場合、警察当局に発見される可能性が高い。そういう日を避けて日程が組まれる。

実行委員はその日に向けて、実行者の安全を確保する方策を準備する。

実行者は命綱を付けることが義務付けられている。ロープを腰に巻き、一度橋の梁をくぐらせて、再度腰に巻き、そして地上にその自由端を落とす。万が一恐怖心からアーチの上で動けなくなっても、そのロープを使って体を下ろすことができるように、である。

実行委員会は軽トラックを準備する。荷台にはマットレスを敷き、実行者に伴置する形で路上に待機する。万が一落下しても、マットレスで実行者を救うためである。交通量の少ない時間帯を選ぶのは、この軽トラ伴置のためでもある。

予定日が決定されると、実行者に予定日が告げられる。申し込んだ後に怖気づいてキャンセルすることは可能であるが、キャンセルがかかるとその実行者からは申し込みの権利が一定期間剥奪される。

実行日、深夜一二時に小さな打ち上げ花火が一発、橋の袂から打ち上げられる。これはセレモ

ニーではなく、上空の風の状態を確認する手段である。強風だと判断されたら、その時点で小佐井渡りは中止となる。

考えられうる限りの安全対策を施し、小佐井渡りは挙行される。そしてこの準備は、実行委員のボランティアで行われることも忘れてはならない。実行委員が軽トラやマットレスを準備し、当日のスケジュールもきちんと確保するためには、ある程度事前の調整が必要になる。事前申請制なのはこのためでもある。

西里の説明によれば、小佐井渡りは今年が最後なのだそうだ。

小佐井橋は老朽化のため架け替えられ、新小佐井橋になる。交通量増加により片側二車線化として規格された新小佐井橋であるが、用地の関係上、まず半分だけ竣工して片側一車線として開通させ、その後旧小佐井橋を取り壊してもう半分の着工を行うという計画となっている。

新小佐井橋の片側一車線はまもなく開通し、旧小佐井橋はその役割を終える。そこからは急ピッチで取り壊し作業が開始される予定という官報が公布されており、旧小佐井橋閉鎖を以って、小佐井渡りの長い歴史に幕が降ろされる。

そのため、夏の運動部の大会前は、例年以上に祈願者が多く、西里は眠れない日々を送ったのだそうだ。

私は、西里から渡された小佐井渡り実行者への手引きを読みながら、西里のそんな話を思い出

していた。

「とにかくさぁ、せっかく準備をしてくれるって言ってたんだから、予定日が決まるまで良からぬことを考えないこと。いいね？」

四缶目のチューハイをチビチビやりながら、私は蒼佑に絡んだ。

「わかってるよ」蒼佑は面倒くさそうな顔をした。奴も既にウイスキーロックの三杯目が空いている。

私の部屋までこの男を引きずってきて、近くのコンビニに飲み物の買い出しに行き、冷蔵庫の中のありあわせのものでつまみを作って、七時くらいから飲み始めた。

姿を見せなかったこのひと月何をしていたのかに始まり、バイトのこと、学園祭の出し物のこと、ネタ卸しの会のこと、落語のこと、就職活動のことなど、色々と話し込んだ。

酔いのピークを迎えた私は、蒼佑という男を部屋に入れておきながら、酔いつぶれて意識を失った。迂闊な話である。

＊＊＊

目を覚ますと、蒼佑の姿がなかった。

奴も相当飲んだはずである。最初はトイレかな、と思った。が、数分たっても戻ってこない。トイレを吐瀉物まみれにされるのもいい気分がしないので、自分もアルコールに足元を乱されな

がらふらふらとトイレまで行ってみる。が、そこにも蒼佑の姿はなかった。
ふと玄関を見ると、さっき閉めたはずの鍵がかかっていない。そして、蒼佑の靴も無くなっていた。
まさか。
慌ててリビングに戻り、冷蔵庫の上の携帯をつかむ。時計は午前一時を回っている。
電話。着信履歴。せ……せ……あった、瀬戸美澪。
美澪はすぐに出た。
「もしもし」
「もしもし。どうしたの？」
「夜遅くにごめん。蒼佑そっちに行ってない？」
「蒼佑？　や、来てないよ」
「そっか。ちょっとごめん、蒼佑が消えた」
「えっ？」
「ごめん、詳しい話をしてる暇がなさそうなんで、切るね。それじゃ」
電話を切ると、私はそのまま部屋を飛び出した。
迂闊だった。深夜一時の外は、朝より数段寒い。しかもコートを羽織ってくるのを忘れた。死にそうなくらい寒い。

もしかしたら蒼佑は無事に自宅に戻っているかもしれない。それならそれでいい。だが、結構なペースで飲んでいたあいつが、どこかで事故に巻き込まれていないとも限らない。あるいはこんな寒い中を路上で寝てしまっているかもしれない。とりあえず探さねば。冴え渡る月光が、道路を照らしていた。

アパートの階段にも駐輪場にも蒼佑はいなかった。近くの路地にも、奴の影は見えなかった。

アパートから大通りまではほぼこの道一本。ここにいないのであれば、奴はもう既に大通りを歩いている可能性が高い。

大通りに出ると右に折れ、小佐井橋方向に進んだ。

酔った頭で考えてみても、蒼佑が行きそうなところは一つしか思い当たらない。

あいつは無許可小佐井渡りをやる気なんだ。

携帯電話を握る。受信履歴。謎の番号。発信。

数度の呼び出し音のあと、西里が電話に出た。

「夜分すみません」

「えーっと、どちら様？」

「昼間お世話になった中澤です」

「……あー、あの娘。どうしたのこんな時間に」

「すみません、大変申し訳無いんですけど、蒼佑、いえ桐谷が姿を消したんです」

「消えたの？」

「いっしょに飲んでたんですけど、気づいたらいなくなってて。今探しているところなんですけど、多分、小佐井橋に行っちゃったんだと思います」
「そりゃまずいな」
「昼間西里さんに、予定日確定までの身柄保護をお願いされていたのに、申し訳ありません」
「いや、正直な話、衝動的に渡ろうとして説得して止めさせた奴には結構あることなんだ。君のせいじゃないさ。それより、今から軽トラを準備して一応僕も小佐井橋に向かおう。君も小佐井橋に行って彼を探してくれ」
「わかりました。すみません。よろしくお願いします」
電話が切れた。
普段は通学で使っているこの道だが、酔った足では小佐井橋までの道のりが遠く感じる。
橋の袂まで来る。照明に照らされて、ランガー構造の登り口のあたりに、人影が見えた。
「蒼佑ぇ！」
私の叫び声が聞こえた瞬間、その人影はランガー構造を登りはじめた。
しまった。そういえば聞いたことがある。躊躇している人間に大声をかけると、咄嗟に行動を起こしてしまうと。飛び降りそうな人間には大声を掛けてはいけないのだ。
小佐井橋の左岸側半分である桁橋構造をやっと歩ききり、橋の中央に位置するランガー構造のたもとに辿り着いた時、蒼佑はすでに三本目の柱のところまで登っていた。ランガー構造の柱は

全部で九本。五本目がその丁度中間だから、三本目というのはもう半分以上登り切っていることになる。

「蒼佑、危ないからじっとしてて」

「いやだ、俺は上まで行くんだ」

「馬鹿言ってないで、助けを待ちなさい」

「助けなんか来るわけないじゃないか」

「もう頼んであるから、ちょっとの間じっとしててよ」

私の静止も聞かず、蒼佑は三本目と四本目の柱の間の梁に進もうとしていた。四つん這いの格好でベチャッと梁にこびりつきながら進む姿は、なんともかっこ悪い。

深夜の静寂の中を、橋の向こう側からせわしないエンジン音が近づいてきた。どんどんと近づいてくるそのエンジン音は五叉路交差点を曲がり、橋のほうに曲がってきた。軽トラック。おそらく西里のものだ。

軽トラは橋の中央、私のすぐ横で停まった。中からは西里が出てくる。

「遅くなってすまない」

「こちらこそすみません。桐谷はあそこです」

私の指差す方向に蒼佑を見つけた西里は、ため息を付いた。

「彼、酔っ払ってるんだろ？」

「結構飲んでいると思います」

「まずいな」
「……」
迂闊だった。本当に迂闊だった。何をしでかすかわからない状態の男に酒を飲ますなんて。
「どうしたらいいですか？」
「とりあえず安全対策としては彼に命綱を付けるしかない。だが、どうやって彼に付けさせたものか……」
「……私が付けに行きます」
こんな事態になったのは私の責任だ。私が彼を救いに行かなければならない。
「……本来なら酔っぱらいにいかせたくはないが、しかたないな」
「いいんですか？」
てっきり強く反対されるのかと思っていた。
「良くはないさ。でも、ダメだと言っても君はいくんだろ？」
「……」
「僕も下で軽トラを伴置させなきゃいけない。ランガー構造を酔っ払って登ってはいけないという法律はないが、酔っ払いである君が道路で車を運転すれば法律違反だ。僕が下で待機するしかない」
「……はい」
「ただし、これだけは守ってくれ。僕は君の命を優先させる。ルールを守らなかった愚か者を救

うために救助者が犠牲になるというのはおかしな話だ。君も、自分の身が危険になったら、辛いかもしれないが彼を助けるよりも自分の身を守ってくれ」

「分かりました」

西里は荷台のマットレスの下に手をつっこみ、黄色と黒のツートンのロープを二本引き出してきた。

「一本は君につける。もう一本は君が持って行き、彼の腰につける。いいね」

「はい」

腰にロープを巻き、もう一本を腰に結わえ付けて、私もランガーを登り始める。

まさか私がこんなことをするハメになるとは思いもよらなかった。

最初の柱までは比較的斜度が急だ。ここくらいまでは歩いて登れそうではあるが、慎重を期すため、ここから私も四つん這いで登る。

一本目と二本目の梁の継ぎ目で、梁の角度が変わる。ゆるやかな角度になるが、その分なんだか頼るものがなくなったような気分になる。

川面にそって、川風が吹き抜けた。寒い。猛烈に寒い。低い気温で体温を持って行かれている上に、橋の鋼材にも体温を奪われていく。接地している手のひらと膝が切れるかと思うくらいに冷たい。

なんとか二本目の柱まで辿り着いた。もうすでに結構高い。ビルの二階くらいの高さがあるのではなかろうか。

蒼佑はもう既に四本目にたどり着いている。が、そこでどうやら彼の電池が切れたようだ。梁に完全に腕を回してしがみついている。

二本目と三本目の間の梁に進む。

背後の遠くの方から、大型トラックのエンジン音が聞こえる。

エンジン音は徐々に近づいてきて、ついに橋が揺れはじめた。トラックが桁橋構造の部分を走っている間はそれほどでもなかったが、私の斜め下を車が走り抜けていった瞬間、橋は強烈に上下に揺さぶられはじめた。私は梁をしっかりと抱きしめる。防錆剤の粉が服を真っ白に染めるが、仕方ない。

揺れは車が過ぎた後も減衰しながらしばらく続いた。小佐井橋に最初に登った学生は白昼やってのけたと言う話だったが、車の往来激しい時間帯に、よくそんな無茶が出来たなと感嘆せずにはいられない。

蒼佑を確認する。梁にしがみついたままの蒼佑は、どうも息が荒い。早急に下に降ろさないとまずそうだ。

寒さと揺れで縮こまった体を梁から引き離し、更に少しずつ少しずつ進む。

三本目の柱に到達した時、背後の遠くから声がした。

「蒼佑！　響子！」声の主は美澪だ。

美澪、いけない。危ない位置の人間に急に声をかけるとまずい。

蒼佑がガバッと体を起こし、また前進し始めた。

なんてことをするんだ、美澪。

「響子、大丈夫？」

私の直下まできた美澪が声をかける。

「大丈夫。よくここがわかったね」私の返答は声が震えていた。

「あの電話のあと、心配になって響子の家に行ったら鍵が開いてて、机の上にこれが乗ってたからもしかして、って」

美澪は手に何かを持っている。はっきりとは確認できないが、おそらく小佐井渡りの手引きだろう。

蒼佑はまたも前進がとまり、四本目と五本目の梁の中間地点でぐったりしている。

四本目の柱にたどり着く。正直、もう下は見たくないくらいの高さである。ここから入水自殺なんて、本当に正気の沙汰ではない。

柱の部分には横に渡された梁もあるので、比較的体を安定させられる。ここで、腰に結わえてあった蒼佑用のロープを取ろうとした瞬間……

一迅の風が吹き抜けた。

体勢を保とうとした瞬間、ロープを取り落としてしまう。

「ああっ」美澪からも悲鳴が漏れた。

ロープは一本しかなくなってしまった。仕方ない。蒼佑には私のロープを使おう。

自分の腰に巻きつけていたロープを外す。下で西里が私を非難しているようだが、仕方ないじゃ

ないか。
ロープの端を口に加え、いよいよ四本目と五本目の間の梁に差し掛かる。この高さを命綱なしで登るのは、本当に怖い。
蒼佑、暴れるなよ。
徐々に近づいていき、蒼佑のすぐ後ろまで体を寄せると、寝ている蒼佑を起こさないように腰にロープを巻き付ける。一度グッと体を落とし、梁の下にロープを通し、もう一度ロープを腰に通す。ループを作った状態でロープの自由端を下に落とせば、蒼佑は多分死なずに降りることができる。
自由端を西里と美澪が握り、蒼佑を下ろす準備はできた。蒼佑を起こし、暴れないように諭しながら、彼を徐々に下ろしていく。完全に荷降ろしである。絶妙に駐車されていた西里の軽トラックの荷台に、蒼佑は吸い込まれていった。
荷台に着地した彼を、美澪が抱きしめた。美澪は泣いている。その二人を見ていると、なんだか私は死んでしまって、天国から幸せな二人を眺めているような気分になってくる。
「蒼佑！　馬鹿！　馬鹿！」美澪が絶叫する。美澪の胸に抱かれた蒼佑は、幸せそうな顔で眠っている。
私は吹きさらしのランガーの上で、寒さに凍えながら、空を見上げた。
星空だった。オリオン座が見える。冷え冷えとするくらい鋭利な星光だ。
私は思った。

宗旨変えをしよう。
私を振るような男は、みんな不幸になってしまえばいいんだ。
きっと星空は、許してくれる。

（医学部医学科六年）

第六回東光原文学賞優秀賞受賞作品

金木犀の彼女

直井　武次

開かれた窓から金木犀の香りがすぅっと流れ込んできた。その香りは教室内の他の匂いを消し去ってしまうのではないかと思うほどに強烈だった。

僕はその香りを、ゆっくりと深く吸い込んだ。乾いた空気と共に、しつこくない爽やかなそれは程よい刺激となって鼻腔を通過する。そうすると、胸の奥が締め付けられるような、懐かしいモノがこみ上げてくる気がする。

昼過ぎの秋の空は雲一つ無く晴れ渡り、澄んだ青色を讃えていた。校庭の木々は夏の頃の翡翠のように輝いていた葉をすっかりと燃えるような朱の紅葉に衣替えしている。風に煽られて紅葉がはらはらと落ち、グラウンドの端の方をモザイクで覆っていた。

午後の初めの授業が終わった教室は気だるい喧騒で満ちていた。グループを組んで話し込んでいる人たちや、机に突っ伏して眠り込んでいる人もいて、みんないつものように、この短い休み時間を過ごしていた。これが三年になったら、みんな必死で参考書とにらめっこすることになる

のだろう。そんな風景を僕は教室の窓側の席から見ていた。

しばらくするとチャイムが鳴り響いた。一瞬、喧騒が止む。しかし、先生が教室のドアを開ける気配がしないので、またグループを組んでいた人たちが話し出して、喧騒が帰ってくる。

この学校は一応進学校ではあるのだが、真面目に勉強するのは三年生になってからと思っている学生が多く、二年以下の教室の空気は常に弛んでいる。僕は気だるくなって、机に突っ伏した。金木犀の香りを感じながら、やがて心地よい眠気が襲ってきた。

放課後の帰り道を歩いていると、金木犀の香りに出会った。金木犀がどこにあるのか気になった僕は、その香りに誘われるように公園に入っていった。

その公園はテニスコート位の広さがあった。まわりは生垣に囲まれ、背の高い大きな木が数本、四方を囲むように植えられていた。滑り台やブランコといった遊具が設置されているが、塗装ははがれ、錆びついた鉄が露出していた。遊んでいる子供の姿は無く、木々の影が落とされたその場所はとても寂しい雰囲気に満ちていた。

そんな公園の隅っこ、影が一番深いところに金木犀が植えられていた。それは、深々とした緑の葉の中に、橙の小さな花びらをたくさん抱えている。地面にも、どこに隠していたのだろうかと思うほどにたくさんの花びらが落ちていた。

僕はしばらくその金木犀を眺めていた。学校でかいだ香りはこの金木犀のモノだろうか。そん

なことを考えていた。
ごおっという、うめき声のような音をたてて、強い風が吹いた。そして、むせかえるように甘く強烈な匂いが、襲うように全身を包み込んだ。頭がくらくらとした。その時、風のざわめきの中で、
「金木犀が好きなんですか？」
と声がした。
僕はそっと、声がした公園の出口の方を見やった。そこには、僕の高校と違う制服をきた女の子が立っていた。
その女の子は茶色のブレザーに身を包み、首元には朱色のスカーフを巻き、艶やかなロングの黒髪をしていた。その制服には見覚えが無かった。少なくとも、この近くにある高校の制服では無かった。
「金木犀は…この香りが好きで、それで気になって…」
僕は答えていた。見覚えの無い制服、見覚えの無い顔であったのに、この女の子には人に対する警戒心や猜疑心のようなものを感じさせないような雰囲気があった。
「私も好きですよ、この香り。でも、私は香りよりも、この小さな花びらの方が好きです」
女の子はこちらにゆっくりと近づいてきた。僕は少し驚いた。金木犀はその強烈な香りが特徴的で、ほとんどの人は花弁の方に感心をなかなか向けないからだ。
「どうして花びらが好きなんですか？」

「かわいいでしょ？小さくって。この橙色も好きなの」
女の子は僕の隣へ来ると、腰を屈めて地面に落ちた花びらを眺めた。
「風に流されて地面を転がるところとか、見ていて楽しいわよ」
変わった女の子だと思った。金木犀の花びらが好きなところも、花びらの動きを見て楽しむところも、僕に話しかけるところも。
「私、草香って言うの。よろしくね。佐伯くん」
僕はまた驚かされた。
「何で僕の名前を？」
「制服、名札付けっぱなし」
左胸に手をやると、固いプラスチックの感触がした。慌てて取り外して制服のポケットに入れた。中学では珍しく無いのだろうが、僕の高校では学校内での名札の着用が義務付けられていた。といっても、律儀に付けている生徒はほとんどいないのだけれど。
「今の世の中、不用心だね」
ふふっと草香は玉子型の端正な顔にえくぼを浮かべて可愛らしく笑った。僕はわずかに心臓の鼓動が早まるのを感じた。
「そうだね…」
僕は鼓動を押さえつけて、辛うじてそれだけ答えた。
しばらく、そうして二人で金木犀を眺めていた。その間も、心臓は落ち着いてくれなかった。

けれど、その鼓動は心地よかった。

ざわっと一陣のかぜがふいた。

「それじゃ、僕は帰るよ」

それをきっかけにするように僕は言った。さっきまでは明るかったのに、既にあたりは夕日に照らされていた。もう、帰らなくてはいけなかった。

「うん」

と草香は答えた。

「ここ、よく通るの？」

と草香がきいてきた。

「学校の帰り道だから。時々は寄り道もする」

僕は答えた。

「じゃあ、また会えるかもね」

草香がはにかみながら言った。心臓の鼓動がまた早まった気がした。

「そうだね…」

そう答えて僕は草香に、この動揺を気取られないように、ゆっくりと踵を返した。そして一刻も早く、けれども名残惜しく公園をでた。

金木犀の香りは薄らいでいった。

家に帰ると、弟の誠—近くの小学校に通っている、小学3年生だ—が階段を降りてくるところだった。
「お帰り」
「ただいま。何か夕飯作ってあるか？」
僕はきいた。
「ううん、まだ」
「じゃあ、何か作るか。適当でいいよな」
「うん」
誠はそう答えるとトイレへ入っていった。僕は製靴を脱いで廊下に上がると、そのまま直進してリビングに入った。そして、ご飯が炊いてあるのを確認した。
「さんまが冷蔵庫にあったよな…」
そうつぶやきながら今日の夕飯の献立を思案した。今日の夕飯は簡単なみそ汁と焼き魚になりそうだった。
鍋に水を流し込み、腑と頭を取り除いたいりこを投入する。それを火にかけて出汁をとる。出汁を作る間にみそ汁の具を包丁で切り、揃えておく。次にまな板にさんまを置き、捌いて開きにしていく。その時に腑を取るのを忘れない。捌ききったら、ガスコンロのグリルで焼いていく。
ここ数年で、料理の腕はかなり上達した。誠も、僕が学校の行事などで遅くなったときに夕飯

を自分で作っているので、同級生の中では一番料理がうまい。
出汁が取れたら具を投入する。そしてしばらく煮てゆく。
その間に僕は、茶碗を食器棚から取り出してご飯をよそった。それをリビングの隣にある小さな座敷の部屋へ持っていく。襖を開けると井草とカビの匂いが鼻についた。
部屋の奥にある小さな仏壇に向かう。仏壇の開き戸はここ最近開きっぱなしになっていて、その奥には位牌と写真が置かれている。写真には白い服に身を包み、こちらに微笑みかけている僕の母が写っている。僕はその前にそっとお茶椀を置き、手を合わせた。

僕はリビングに戻り、鍋の火を止めた。冷蔵庫から味噌を取り出して、適量をお玉にとり、鍋に溶かし入れた。グリルに入れたさんまを皿に盛り付け、味噌汁を注ぎ、ご飯をよそう。それらを食卓へ運んだ。
「誠、夕飯できたぞ」
「いま行く」
とんとんとんっと階段を降りてくる音がして、誠がリビングにやってきた。
「たべるか」
そうつぶやいて、僕は席に着いた。

夕飯を食べ終わって片付けをした後、風呂にはいった。そして、僕は二階にある自分の部屋のベッドで寝転んでいた。

ぼうっとしていると思い浮かんでくるのは、今日、公園であった草香という女の子のことだった。不思議な女の子だったと思った。あの制服はどこの高校のだろうか。どうしてあの公園にいたのだろうか。そんなとりとめのないことをつらつらと考えているうちに、僕はまどろみの中に落ちていった。

次の日の放課後、またあの公園に行ってみた。今日も子供の姿はなく、金木犀は甘い香りを発している。

「今日も来てたんだ」

金木犀を眺めていると、昨日聞いた声が背後から聞こえた。振り返ると、そこには昨日と同じ恰好をした草香の姿があった。

「また、草香さんと会えると思って」

「私もそんな気がしてた」

僕達は笑いあった。草香の、秋の空のように透き通った笑い声が耳に心地よかった。

僕たちはブランコの近くにあったベンチに座った。

「何で昨日はこんなところに居たの？」

草香さんがきいてきた。
「学校でかいだ金木犀の香りがどこからしたのか気になって。で、帰り道に偶然金木犀の香りがしたから、その香りをおって来たんだよ。草香さんはどうして？」
「私も金木犀の香りが気になって、この公園に入ったの。でも、先客がいてビックリしたけど」
そういって微笑む。
「僕は、知らない人に話しかけられてビックリしたな。しかもそれが女の子だったから余計に。…どうして僕に話しかけたの？今になって思うと、あの時の僕は人気の無い公園で突っ立ってる…不審者だったと思うけど」
少し間があって、草香が答えた。
「あなたが金木犀の前に立っているのを見て、多分、私と同じように金木犀に誘われて来たのかなって思ったから、話かけてみたの。そしたら本当にそうだった。でね、私と同じような人がいて、うれしかった。自分と同じ変なことしてる人がいて」
「変なこと？」
「だって、普通の人だったら金木犀の香りがしたって、そんなに気にかけないでしょう？『金木犀が咲いてるな』って思う程度で済ませるじゃない？いつもの私だったら、そうしてた。でも、昨日はどうしても気になって、金木犀の香りを追いかけてたの。私、変なことしてるなっておもいながら」
そうか、僕は変な人だったのか、と呟くと、草香さんはふふっと笑った。

「…それほど気になってたの。でも、金木犀の香りって、なんか、懐かしい感じがしない？哀愁漂うっていうような」
「僕もそう思う。どうしてだろうね」
「知らないわ。でも、人それぞれに思い出があるでしょう？その思い出が、金木犀の香りと結びつけられているんじゃないかしら」
「…そうかもね」
僕は答えた。

しばらくそうして話し込んだ。草香さんは高校三年生で、市外の高校に電車で通っているらしい。このあたりでは、あまり市外の高校へ通う人がいないので、制服に見覚えが無かったのだ。いたとしても少人数だろう。その高校は偏差値が全国的にも高く、全国から受験する人がいるので、この辺から合格する人が少ないのだ。だから、僕はそんな高校に通えて羨ましいと言った。すると、「そんないい所ではないよ」と草香さんは言った。
「勉強第一っていうのが前提みたいなところがあって、勉強できる人は出来ない人を見下してる感じがあるの」
「私は、見下される方。あの高校に通ってるからといって頭いいわけではないのよ」
と、さらりと草香さんは言った。

さらに、今は大学受験が控えているので、毎日。教室の空気が重くなっているという。
「皆、上の大学を目指すの。そうすると結局、皆だいたい同じ大学を受験しようとする。すると、いままで仲良くしてた人たちの間に妙な空気が流れるようになる。その空気が教室中に蔓延してるの」
「そんな時、はけ口になるのは私のようないい大学を受験しない人たち。心の中で私たちを見下して安心しようとするの」
「直接なにか言われるわけでは無いけれど、会話するときとか、相手が自分をどんな風に思ってるか何となく伝わってくるのよね」
「気にしなきゃいいんだけど、そんな風にできなくて」
「だから、金木犀の香りを追いかけていたのは、そんな空気から逃げたかったからなのかもね」
「昔の、高校にはいる前の楽しかった時に戻りたいと思うもの」
と草香さんは矢継ぎ早に言った。

僕は草香さんの話を聞いて、僕の中にも同じような感情があることに気づいた。しかし、その事に僕は素直に喜べなかった。草香さんと僕は立場があまりにも違っていたからだ。

僕の母はもうこの世にいない。5年前、ちょうどこの時期に交通事故で亡くなった。

日曜の、近所のスーパーからの帰り道だったと思う。当時、小学三年生だった僕は母よりも数歩先を歩いていた。そして手にはスーパーで買ってもらった、塩ビでできたスーパー戦隊の人形を握って遊んでいた。だから、その先に曲がり角があることに気がつかなかった。

急に後ろから母に抱きしめられた。そして、ど突くような衝撃が全身を打った。母の、濁ったような息の漏れる音が聞こえた。つかの間の浮遊感の後、こんどは頭に衝撃がきた。僕はその時、何が起こったのか分からなかった。気づいたときには母に抱きしめられて、血だまりの中にいた。

鉄の匂いが鼻をついた。母の体温を感じることができたが、心臓の鼓動は、聞こえなかった。母が死んだと気づいた時、僕は周りの音が聞こえなくなるほど泣いた。

やがて救急車がきて、母と僕と、母を轢いた運転手は病院へ搬送された。

母は病院で死亡が確認された。即死だったらしい。僕は仕事を中止して駆けつけてきた父に何が起こったのか聞かれた。僕は事故が起こった時よりも涙はおさまっていたが、ひどいしゃっくりを繰り返していた。なので、たどたどしくその時の事を説明した。話し終えた途端、父に首の骨が折れるかと思うくらい強い力でぶたれた。そして、ひどく怒鳴られた。その怒声は病院の窓ガラスを震わせるほどだった。父の顔は見た事も無い怖い形相をしていた。普段の父は気が弱く、

滅多に怒ったりする人ではなかった。なので、その時は呆然とした。そして、頬の痛みと、父が怒ったことで、どうしようもなく母を死なせたのが自分だと自覚させられて、罪悪感が溢れてきて、事故の時よりも激しく泣いた。ひたすら「ごめんなさい」とあやまりながら。

この時から僕と父親との間に溝ができた。父は、元の気弱そうな雰囲気に戻ったが、母を失った悲しみを忘れるかのように仕事に没頭した。

僕は、僕のせいで母が死んでしまったことに罪悪感を持ちつづけ、家では、あの怒った顔が忘れられず、父親を避けつづけている。

誠の世話をしているのも、料理がうまくなったのも、全部罪滅ぼしのつもりなのかもしれない。

金木犀に惹きつけられたのは、草香さんは受験の弊害の被害者で、人の悪意から逃げるためだった。だけど、僕はたとえ事故であっても母を死なせるきっかけを作った罪人で、罪悪感から逃れるためだった。

僕は草香さんに、自分のこの汚いところを見せたく無かった。だから、僕はそれから口を噤んで草香さんの話に相槌を打っていた。

やがて辺りは薄暗くなり、制服を着ていても肌寒くなるような風がふいた。

「ごめんね、一方的に話しちゃって」

草香さんは言った。

「いや、楽しかったよ」

僕は笑顔を取り繕って言った。

「というより、一年後の参考になったかな」

と、取り繕ったのを隠すように付け加えた。

「君の学校じゃ、私の学校のようにはならないと思うよ」

「そうだろうね。みんな三年になるまではそんなに勉強しないだろうし、三年になったらそれ相応の大学目指したり、就職したりするだろうからね」

口調はおかしくなってないだろうか。僕は昨日とは別の意味で、この動揺を草香さんに気付かれたくなかった。

「私は君がうらやましいよ。ストレスがない自由な感じで」

「それ、見下してる?」

僕は努めておどけていった。

「違う、違う。そんなんじゃないよ」

草香さんは、そんな僕の心情に気付かない様子で答えた。草香さんはえくぼを浮かべて笑い、

僕は薄い仮面を被って笑った。

「もうそろそろ帰ろうか」

しばらくした後、僕は切り出した。

「そうね、もうこんなに暗くなったしね」

そう言って草香さんはベンチから立ち上がった。

「また、会えるかな」

草香さんはこっちを見てそう言ってきた。

「君の話ほとんど聞いてないし」

その言葉は今となっては聞きたくない言葉だった。もしこれ以上話をしたら、うっかり汚れた部分をさらけ出してしまうかもしれない、と思った。

「あんまりおもしろくないよ」

普通にいったつもりだったが、動揺で声が硬くなってしまった。ひやり、と掌に汗をかいた。草香さんにばれてしまっただろうか。そんな思いが頭をよぎった。

そして草香さんは言った。

「…私にあんまり話したくないの？」

今度こそ、激しく動揺してしまった。

「…ごめん。そういうわけじゃないんだけど…」

僕はゆっくりと言った。言葉が続かず、黙り込む。
「…わかった。無理して話さなくていいよ。ごめんね、こっちが勝手に話かけていたのに」
草香さんは申し訳なさそうに言った。
「でも、いつか話してくれるかな？」
僕は答えられなかった。

家に帰ると、もう誠は夕飯を食べ終わっていた。
僕は誠が作ってくれた夕飯をひとりで食べ始めた。献立は昨日、僕が作った物と同じだった。

夕飯を食べ終わる頃、玄関のカギが開いた。父が帰ってきたのだ。そして、父がリビングに顔を出した。父はくたびれたスーツを着ていた。手に提げたカバンは淵のほうがボロボロになっている。
「ただいま」
父が言った。
「おかえり。ねえ、父さん」
僕は父を呼び止めた。
「母さんのことだけど」
その言葉で父の眉がぴくりと動いた。僕は慎重に切り出した。

「母さんが死んだのは、やっぱり僕のせいだったのかな」

父はしばらく黙りこんだ後、ゆっくりと落ち着いた調子で言った。

「確かに、真一がちゃんと前を見ていたら、朱里のそばにいたら、朱里は死ななかったのかもしれない。でも、朱里が死んだのは、あの運転手のせいでもある。真一のせいだけじゃない」

続けて父は言った。

「病院で真一をぶったのは、俺が悪かった。朱里が死んだと聞いて、そばに真一がいたと知って俺は、どうしようもなく気が動転してしまった。真一から事故の事を聞いて、感情が抑えきれなくなってしまった」

父はだんだんと涙声になっていった。

「俺は、まだ小さかった誠の世話を真一に押し付けて、仕事に打ち込んでいる。朱里の面影がある真一たちを見るのがつらかった」

そして、父はこういった。

「誠を育ててくれてありがとう。すまなかった」

父の口からそんな言葉が出た。僕は、自分の中にあるいくつかの蟠りが溶けていくような気がした。同時に、父の姿がぼやけ、頬を熱い雫が流れた。

次の日の放課後、僕はあの公園へと向かった。公園の入り口に着いたところで、この二日で見

慣れた制服が目に入った。その人は金木犀のほうを向いてしゃがんでいた。地面には彼女が好きだと言っていた橙の花びらが風に踊っていた。

「来てたんだ」

僕は公園へ一歩踏み出して言った。彼女は振り返る。

「佐伯君に会えるかと思って」

草香さんはそう言ってはにかんだ。懐かしさを感じさせる甘い風に、草香さんの艶やかな髪が流され、肖像画のように奇麗だった。もうしばらく眺めていたかった。けれど、伝えなくちゃいけない事がある。

「今日は話したいことがあって」

僕は草香さんの隣に立って、そう言った。

「いやな事になるかもしれないけど、聞いてくれるかな」

彼女は笑顔でうなずいてくれた。

金木犀の花びらが風に乗せられ、胸を締めつけるような、甘い香りが僕たちを包んだ。

（工学部情報電気電子工学科一年）

選考を終えて

総評　「言葉磨きの楽しさと喜び」の発見
＝東光原文学賞の充実・発展に向けて＝

選考委員長　西川　盛雄

熊本大学東光原文学賞は今年で六回目を迎え、またひとつ新たな歴史を刻んだ。応募者は今年度は十九名である。学部生十九名で七学部すべてから応募があった。大学院生の応募は今年度はなかった。内訳は男性十一名、女性八名である。手順は例年通り全応募作品のうち附属図書館による第一次選考を通過した八編を選考委員が精読し、その中からもっとも優れた作品を大賞、他の優れた作品は優秀賞として選考した。本年度は優秀賞は四編で順位は付けていない。選考は昨年通り岩岡中正委員、高峰武委員、そして筆者の三名で担当させていただいた。

大賞に選ばれた『四色衣』は夢幻の世界を描き散文詩のような趣があった。ものを言う超自然の果実や花たちなど全体は幻視的な創作スタンスで貫かれている。「現」と「幻」の境界線を越えて描く方策は「脳死体験によって垣間見た天の国」という言い方と相俟って作者の表現に対す

るユニークな視点として興味深い。

『金木犀の彼女』は抑制された文体で人間は「悲哀」で繋がることを示唆して出色の作品である。深刻な心の襞を抱えた青年の逸らさぬ心の描写はしみじみとして達意である。公園の金木犀が絶妙の背景効果を発揮している。ただし量をもう少し増やして作品に厚みをもたせる工夫もあっていい。

『さよなら、ランガー』は学生生活（青春）の思い出の「記憶」として創作の動機は明快である。「小佐井渡り」という秘密の〈祭り〉を軸にしてこれに関わる人たちの人間模様の描写が面白い。

『ＨＥＮＳＨＩＮ』はどこかでカフカの『変身』を頭においていたのだろうか。人間存在の不可解さに挑戦している点は問題意識の現代性をよく踏まえている。主人公は父の無理心中の理由を問いつつ自らの心理的葛藤を描く。田所という人物の存在を際立たせ謎めいた終わり方が印象に残る。

『水面の蝶は空を見るか』は川、空、水底などの瑞々しい詩的な背景描写に優れていたが構成や登場人物の心理的描写に若干の弱さが感じられたのが惜しまれる。無理や力みのない表現はスタイルの問題としてそのまま伸ばしていって欲しい。

他に『久遠の果てに』は芸術至上主義を描いて印象的であったが感情をコントロールする言葉の抑制力に今後の課題を残しているようだ。『モノトーン・クラウド』は作品中に記述内容の矛盾があったり、言葉使いに違和感があるものの、色彩と音楽のコラボの視点は印象的である。

『虫追いの筆』はストーリーの展開に何処か不自然さを感じさせる処があったが、心に残る作品であった。

いずれの応募作品も表現行為に対する真摯な姿勢が窺われ、気持ちよくまた頼もしく思われた今回の選考であった。今後ますます作品のレベルが充実し、応募作品の数が増えることを願っている。最後にこの文学賞の趣旨の初心に帰って「ことば」を大切に思い、文章表現は正確に、そして今後も言葉磨きの楽しさと喜びの発見に努めてほしいと願っている。

●西川　盛雄（にしかわ・もりお）

熊本大学名誉教授、熊本大学・学術資料調査研究推進室客員教授。著書に、『ラフカディオ・ハーン再考』（共著、恒文社、１９９３）、『続ラフカディオ・ハーン再考』（編著、恒文社、１９９９）で熊日出版文化賞。『ハーン曼荼羅』（編著、北星堂、２００８）、詩集：『半月』（葦書房、１９８０）、『ことづて』（石風社、１９８９）、歌集：『魚歌喪失』（雁書館、１９８３）、『風の行方』（砂小屋書房、１９９５）、熊本県民文芸賞・評論の部一席（１９８２）。

選考を終えて

選考委員　岩岡　中正

今回は昨年を上まわる応募数で、新人の登場も目立った。最終選考に残った作品は、どれも多様なテーマや語り口で、それぞれ個性的だった。今年は以下の五点が、それぞれキラリと光るものをもっていた。

「水面の蝶は空を見るか」は、冒頭部分はやや分かりにくいが、全体としてストーリーの展開も表現も確か。若者らしい揺れ動く心理を丁寧に描いた、瑞々しい感性あふれる作品である。とくに川や水への愛着がよく出ていて、「私は、川が好きだった」以下の叙述は、身体性という点でとくにすぐれており、強く惹かれた。ただ、ややひとり合点の冒頭部分は不要でこの構成のミスが惜しまれる。

「ＨＥＮＳＨＩＮ」は、父の知人の女性「田所さん」へのほのかな思いを軸に、少年期の心理を丁寧に描いた佳品である。父や田所さんというどこかとらえどころのない人物の描写を通して、人間存在の不確かさにまでふれたところが手柄である。

「四色衣」は独特の幻想小説だが、次々と展開する軽やかな一種のアニメの世界の文学的表現のようで、これも現代の若者の表現法のひとつの可能性を示している。季節ごとの煉獄の描写は細やかで会話も適切、全体の構成も流れるようで、ひとつの自分の世界と文体をもっている。し

かし他方、それは欠点でもあって、どこか甘さや冗長さもある。もう少しコンパクトにまとめていれば、さらに良かったと思う。

「さよなら、ランガー」は、意外なテーマでありながらもどこかリアリティのある話で、思わず引き込まれるような面白さがある。ドキュメント風のストーリー展開で筆づかいも確かで、読みやすい作品。青春の無謀を切り取って見せた青春小説である。

「金木犀の彼女」は、ストーリーがシンプルで、とくにメッセージ性があるわけでもなく、やや印象が薄いが、かえってその抑制の利いた軽やかで淡白な文章が魅力。全体として、さらりと無理のない省略の利いた文章で、どこか捨てがたい味のある小品である。このようなエッセー風の小説もあっていい。

その他では、「久遠の果てに」は、「欠損の美学」をテーマにした挑戦的で力強い作品だが、そのぶんやや過剰な表現が気になったし、構成や展開で、理念やテーマに引っ張られたところがあった。

また、「虫追いの筆」は、オートソドックスでさわやかな歴史小説だが、ストーリーにやや新味を欠き、主人公への「若殿」の信頼がやや不自然な点が気になった。

これらのもう一歩の惜しい作品も含めてすべて、さらに今後の飛躍を期待したい。

●岩岡　中正（いわおか・なかまさ）

熊本大学名誉教授、俳誌「阿蘇」主宰。㈳日本伝統俳句協会理事。著書に『詩の政治学―イギリス・ロマン主義政治思想研究』（木鐸社、１９９０）、『転換期の俳句と思想』（朝日新聞社、２００２）『石牟礼道子の世界』（編著、弦書房、２００６）、『ロマン主義から石牟礼道子へ』（木鐸社、２００７）、『虚子と現代』（角川書店、２０１０）で第11回山本健吉文学賞・評論部門。『子規と現代』（ふらんす堂、２０１３）。句集『春雪』（ふらんす堂、２００８）で、第50回熊日文学賞。『夏薊』（ふらんす堂、２０１１）。

講評　何を表現するのか

選考委員　高峰　武

私の持論だが、どんなに観念的であっても、どんなに個人的な事柄でもあっても、それが普遍性を持っておれば、表現されたそれは紛れもなく文学ということだろうと思う。古今東西、文学はそうやってそれぞれの民族やさまざまな共同体の中で、あるいは個人の中で記憶や記録に残ってきた。それ故、文学は人が生きていく上でなくてはならないものになっているのである。

第六回東光原文学賞の大賞に選ばれた「四色衣」は、夢や死などの要素を寓話的な構成で、幻想的に展開して読ませた。登場する蔓薔薇や孔雀などが暗示する世界はこの世の生の在り方だ。杏林のエピソードなどやや古びたところもあったほか、表現そのものに品性を欠く箇所もあったが、この点を差し引いても、ストーリーの作り方という点で秀でていた。

優秀賞の「ＨＥＮＳＨＩＮ」は、父親の心中の話を中核にして、巧みな表現で完結した作品となっている。若者らしい斬新な表現もあり、父親の交際相手と思われる女性の描き方もいい。ただ、父親の心中の話が全体として消化不良になっている。

「水面の蝶は空を見るか」は、水の描写がとりわけ優れている。詩的な印象もあった。水底と

水面とその上の空間という交わることのない三層の心理を展開する方法も面白かったが、恋物語の展開にはもう少し、深みがほしい。冒頭部分は必要なかったのかもしれない。

「金木犀の彼女」は、高校生の揺れる心情が金木犀を背景に爽やかなタッチで描かれた好作品だった。飾りのない文章も好感がもてた。ただし、母親の事故死とそれをめぐっての父親との和解の部分には唐突な感じが否めなかった。

「さよなら、ランガー」は、白川に架かる子飼橋を彷彿させる橋をめぐる青春ストーリーで、物語性があった。人間の描き方もそれぞれに丁寧だったが、明らかな変換ミスがあったのが惜しい。

このほかの作品では、「モノトーン・クラウド」は巧みな表現もあったが、構成にやや無理があったように思われた。「虫追いの筆」は時代もので意表を突いたが、設定に既視感があった。「久遠の果てに」は倒錯した感情の提示に見るべき点もあったが、やや独り善がりではなかったか。

応募があった今回の作品全体に言えることだが、変換ミスと思われる誤字が目についた。書いた本人にとっては、たまたまミスをしたということだろうが、読み手にとっては別の言葉を示されたことになる。ものを書く人がやってはいけないことだ。丁寧さもまた必要なことである。

●高峰　武（たかみね・たけし）

熊本日日新聞社取締役。早稲田大学第一文学部仏文科卒。１９７６年、熊本日日新聞社入社、１９９１年東京支社編集部長兼論説委員、１９９９年社会部長兼論説委員、２００５年編集局長、２００８年論説委員長、２０１３年６月から現職。著書・共著に「ルポ精神医療」（日本評論社）、「巨大ダムに揺れる子守唄の村」（新風舎文庫）、「新版　検証・免田事件」（現代人文社）、「検証ハンセン病史」（河出書房新社）、報道写真集「水俣病50年」（熊日情報文化センター）、「水俣病小史」（熊日情報文化センター）、「原田正純追悼集　この道を―水俣から」（熊本日日新聞社）。連載「ルポ精神医療」と連載「検証ハンセン病史」は日本新聞協会賞受賞。

第六回熊本大学東光原文学賞作品集

発行日　二〇一四年三月三十一日

編集・発行　熊本大学附属図書館
〒八六〇―八五五五
熊本県熊本市中央区
黒髪二―四〇―一

印　刷　株式会社かもめ印刷